

『譚綴』

『紗代と志麻』

九谷 六〇

屋間の暑さを忘れさせるような涼風が、大川の川面を渡っている。

川沿いにある小体な仕舞屋造りの紗代の家。浴衣姿の紗代と志麻が、二階で熱い茶を啜りながら開け放った窓から大川を見ている。窓からは花見橋が見える。

部屋には心地良い風が流れ、座敷簾が緩やかに揺れている。二人の傍には豚の蚊遣粉かやりこが置いてあり、細い煙を燻らせている。蒸し暑さは感じないが、二人は所在なさげな様子で団扇を手している。時たま思ひ出したように浴衣の袖口に風を送ったり、蚊を追ったりしている。

「どうだろうねえ、そろそろ互いに生まれ月を教え合っても……」

「ふふ、今更と思うけど……。二人が内緒にしているのは、生まれ月だけ。内緒のままお墓に入っても良いんじゃないのかい」

紗代には、もう一つ、志麻に内緒にしている事があった。慎吾との切ない想い出だ。紗代は、慎吾から貰った文をいつも懐に入れていた。でも、これだけは、志麻にも言えない。

「じゃー、あの世で教え合おうか」

(一)

紗代さよと志麻しまが出会ったのは、深川八幡のお祭りの時であった。祭りは三年置きに開かれる。華やかな祭りには土地の者だけでなく近郷近在から大勢の人々が集った。町人や農民、それに大川の向こう側にある武家地からは旗本や御家人、藩士たちが来た。八丁堀は、深川のすぐ向かい側で近いためか、朱房の十手を腰に差した与力や粋な半羽織姿の同心たちも顔を見せていた。

この日は侍も庶民もない。境内に所狭しと並ぶ屋台をからかったり、風車を買ったり餡ころ餅を頬張ったりした。

祭りの呼び物は、芸者衆による手古舞てこまいである。男鬘おんこに台肘たいひじの長襦袢、肩抜き染めの着物と裁着袴に草鞋履きという男姿。芸者衆が神輿行列の先頭を木遣りで練りだすと人込みの動きが止まった。

「お父さま、あれは何ですか」

北町奉行所同心、堀田藤次郎に手を引かれた志麻が大きな声で訊いた。

「あれはな、手古舞というものじゃ」

すぐ側にいた子供も親に訊いている。

「ねえ、何なの…… あれ」

「紗代、粋だろう。辰巳芸者は気風も良けりや見栄えもいいや。芸者衆つてのは良
いもんだろう」

「いつものお姐さん達と違うね。男みたいな格好だけど…… 芸者衆つて呼ぶの」
傍にいた志麻が口を開いた。

「あれは、手古舞つて言うのよ」

それを聞いた紗代が、キツとして志麻を睨んだ。親たちは顔を見合わせ、軽く
会釈をした。

「おとつちゃん、この子、変なこと言ってる。あれは芸者衆つて言うんだよね」

紗代の父親は、藤次郎に頭を掻きながら、

「旦那、子供にはちゃんと教えなきゃいけませんな」

と言つて紗代に話した。

「お嬢さんが言うとおり、あれは手古舞つて踊りだ」

紗代は、頬を膨らませて喜助を睨んだ。父娘の遣り取りを聞いていた藤次郎が言
つた。

「おぬし、仕出屋兼松の喜助ではないか」

「へえ、おっしゃる通りで。いつもお役目、ご苦労さんです」

「何を勿体振つて。今日は非番だ。可愛い娘だな。歳は幾つだ」

「へえ、九つでして……」

「そうか、志麻と同一年だな。お紗代、拙者の家はな、花見橋を越えてすぐ近くに
ある。遊びに来ないか。志麻も喜ぶ」

志麻は顔を赤らめ、恥ずかしそうに藤次郎の後ろに隠れた。紗代が藤次郎の顔
を見ながら言った。

「いやっ！ 侍の子は生意気だから」

これには喜助も驚いてしまった。だが、藤次郎は笑っている。この言葉を聞き、
志麻がさつと顔を出した。紗代と志麻が互いに相手を見た。別に睨み合っている訳
ではないが、二人とも目を逸らせないでいた。

「そうか、侍の子供は生意気か。志麻、おまえは生意気か」

志麻は頭を横に振った。

「旦那、お屋敷は存じております。紗代で良かったら遊んでやってください」

喜助は帰りしな、お侍を相手にあの様なことを言っではいけないと紗代を諭した。紗代は喜助に手を引かれながら、

「だつて本当のことだもの。侍の子供は、いつも威張っている」
と詫びれる風もない。喜助は、皆が皆そうではあるまいにと思うものの否定できないでいた。

この国を治めているのは幕府、つまり侍だ。既に平和な時代に入り、侍が戦さなどを名目に威張り散らすこともない。だが、やはり侍と町人は違う。治める者と治められる者。ところが経済的な面では立場が入れ替わっている。町人は働きに応じて金が手に入るが、戦さがなくなつた今、侍は恩賞も貰えなければ、家禄を増やす事もできない。幕閣や役付きはともかく、無役の旗本や御家人たちは苦しい。物価が上がるのが貰える扶持は常に一定であり、世の中の経済的な動きに付いて行けない。ましてや浪人ともなればなお更である。町人の方が余裕ある毎日を送っている。しかし、侍は侍。侍の子供が生意気になるのは致たし方ないことだつた。

「紗代、志麻さんは生意気じゃないかも知れないよ」

紗代の頭の中には、志麻の綺麗な顔が刻み込まれていた。怒ってはいなかったが、侍の子は嫌いと言つた時の志麻の驚いたような顔。紗代は、志麻を思い出しながら黙って歩いた。同じ年だという。

紗代の心にはもう一つ、強烈な印象が残っていた。きりつとした姿で手古舞を踊る芸者の姿。

——あのようにになりたい。手古舞とか言う踊りを大勢の前で踊りたい。見ていだけじゃ嫌だ。私は芸者さんになる。

紗代は心に決めた。

「お父さま、何で紗代さんは私のことを生意気って言つたのですか。お話もしてないのに」

志麻も紗代のこと頭から離れなかつた。あの子は、はつきり嫌と言つた。

志麻は、町人の子供と遊ぶことがあるが、大抵の子は紗代のようにはつきりとした物言いをしていない。それに仲が良いようでも、何処か遠慮があることも知っていた。だが、あの子は違つた。

「志麻、あのようにはつきりと自分の考えを言うことは良いことだぞ。だが、相手のことも考えた上で話さなければな」

「相手のこと……」

志麻は、良く判らなかつた。

「お父さま、紗代さんは遊びに来るでしょうか」

「そうだな、いずれ来るかも知れんな」

志麻は、来て欲しいと思つた。気になつていた紗代のことが落ち着くと、今度は手古舞が甦つてきた。大勢が練り歩いていたが、志麻の目には、すつきりとした芸者衆の姿しか残つていなかった。

「紗代さんが芸者と言つていましたが、志麻も芸者になれるのですか」

藤次郎はこの時、軽い気持ちで言つた。

「なれないこともないが、まあ、なれないな。志麻も大きくなれば判るが、違う世間の人たちだ。何故、そんなことを訊く」

「……」

「志麻、言つてごらん」

「活き活きしていました」

志麻は自分も大勢の前で思いつきり胸を張り、輝くように踊る芸者になりたいと思つた。

次の祭りの日、紗代も志麻も一人で手古舞を見に行つた。手古舞を見ると、昨日と同じように胸が高鳴つた。芸者さんになりたいとの思いはさらに強くなつていた。あの子のことが気になる。だが二人が顔を合わせることはなかつた。

祭りも終り、夏を迎えた深川界限はいつもの落ち着きを取り戻していた。其処かしこで金魚鉢や風鈴を担いだ棒手振りの売り声が響き、燕の巣作りが始まつていた。

喜助の仕出屋は季節に関わらず繁盛していた。働き手は喜助と妻のおトヨ、それに二人の小僧だ。料理の注文は茶屋や割烹を持たない料亭から入つた。

芸者遊びだけの茶屋は洒落た献立の注文をする。豪華で量が多い注文は遊廓からのものだ。この場合は揚屋に仕出すのだが、客は矢鱈と見栄を張る。客だけで到底喰い切れる量ではないが、皿の料理はいつも綺麗になくなつていく。揚屋の亭主や遣手^{やりては}婆、下足番たちがお零れを頂戴するからだ。喜助にとつてみれば、どうであれ自分の作つた料理が食べ残しなく綺麗になくなつていくのは嬉しいことであつた。

喜助は若くして兼松を始めた。

若い頃は、廓や花魁に興味を持っていた。いずれ俺も遊べるようになるのだろ

うか。だが、裏を知つてしまふと表の世界が空々しく感じられ、遊ぶ気など全く持たなくなつた。廓の連中は客を下にも置かぬ扱いをするが、客を買い手ともと呼ぶ。錢だけが目当ての世界である。置屋からの注文は弁当のような軽いもので、余り儲けはない。だが喜助は心を込めて作つた。女将や芸者たちは静かに弁当を味わつてくれる。喜助は置屋と呼ぶのを嫌つた。確かに芸者を置いているのだが、置くという言葉は芸者を物扱いしているようで気に喰わないからだ。店の者には屋形と呼はせている。

船宿からの注文も多い。舟遊びの客は宿に料理を頼むのだが、嬉しいことに、兼松は旨いとわざわざ指名してくれる客もいた。江戸湾には、大川から滋養たっぷりの水が流れ込むため、江戸前の魚介類は格別の味である。当然ながら兼松は江戸前の魚介類を扱う。夏になると屋形舟や猪牙舟で遊ぶ客が増え、注文も多くなる。喜助は生ものには気を使った。夏になるとお造りなどは出さず、必ず湯通しをするか焼物か煮物にした。

若い頃、喜助は料理を作るだけでなく岡持ちを手に威勢良く配達したものだ。幾つもの料亭や屋形の女将とも顔馴染みになつた。

女房のおトヨは、ある料亭で仲居をしていた。喜助にとりその料亭はお得意さまであり、度々、仕出しをした。そんな時、喜助はおトヨと出会つた。ある日、おトヨが笑顔で言つた。

「喜助さん、精が出るね。あたしや、あんたのような働き者が好きだよ」

おトヨは喜助が好きだと言つた訳ではなかつたが、喜助は自分に対する言葉だと思つてしまつた。

翌日、紋付袴姿の喜助が料亭の女将の前で畏まって言つた。おトヨを嫁にした。この話を聞いたおトヨはびっくりしてしまつた。この人、勘違いしている。とは言え喜助は働き者であり、改めてその姿を見れば、なかなかの男前。一も二もな夫婦になつてしまつた。喜助はおトヨを大事にした。子供は紗代一人だ。

藤次郎は、八丁堀に七十坪ほどの屋敷を構えている。妻の綾乃は、与力の娘であつた。奉行が間に入り、縁が結すばつた。男の子を願つていたのだが子供は志麻だけだつた。

藤次郎は、定町廻りの同心である。

この役は三廻り同心の一つだが、町奉行の中でも憧れの役である。町奉行所には北と南で月交替があり、訴訟などを受け付ける月と書類整理の月を交互に設けて

いる。だが定町廻り同心には月交替はない。つまり年がら年中働き詰めである。そこで藤次郎は自分で非番の日を決め、体を休める事にしていった。

矢鱈と忙しい定町廻り同心だが、江戸市中を朱房を腰に半羽織姿で颯爽と見廻った。粋でいなせな定町廻り。町人たちからも頼られている。だが三十俵二人扶持の下級武士に変わりはなく、家計は楽ではない。そこで下級武士たちは種々の内職をする。藤次郎の家でも内職をしていた。運良く綾乃も草木が好きだった。女中の喜和にも手伝わせ、庭で朝顔やほおずきを作らせている。出来上がった鉢植えは、香具師に頼み、縁日などで売ってもらう。これでも何がしかの足しにはなる。

また、高は知れているが定町廻りには臨時の収入がある。常町廻りは各町内にある自身番を廻るが、併せて大店にも顔を出すことになっている。大店では、お勤めご苦労様ですと袖に握りを入れてくれる。一種の賄賂とも言えなくはないが、これは役得でもあり、ごく普通のお決まり事となっている。なにしろ岡っ引きや下っ引きの手間賃は自腹である。綺麗な事は言っていられない。

「父さん」

紗代は、三年前の祭りの日から、喜助をおとつちゃんと呼ぶのを止めていた。志麻がお父さまと呼んだのが気になっていたのだ。真似をする積りは毛頭ないが、おとつちゃんでは余りにも子供染みていると思ったのだ。急に父さんと呼ばれた喜助は驚いたが悪い気はしなかった。

喜助は、魚を捌いていた。

「父さん、あたし芸者さんになりたい」

聞いた喜助は驚いてしまった。

兼松は、界限でも名の通った仕出屋になっている。そろそろ小僧も増やそう、それに筋が良さそうな小僧を板前として育てよう。もう子供は産まれないだろう。腕の良い板前を紗代の婿として迎えれば兼松は続く。兼松は大店ではないし、見栄を張る訳でもないが、跡取りとして、そろそろ紗代にお稽古事でも……。喜助がそんな事を考えていた矢先であった。

話しを聞いた喜助は、危うく包丁を滑らせそうになった。手を止め、喜助は考え込んだ。紗代は何を考えているのか。だが、何故だか判らぬが、ふっと屋形絹弥の女将、静の顔が浮かんだ。俺は何を考えているのだ。喜助は頭をぶるっと振った。

「紗代、芸者はな、大変な仕事なんだぞ。踊りや三味線に太鼓……。父さんは賛成できないよ。紗代、実は……。紗代にはこの店を継いで欲しいと思っているんだ。

いやいや、今すぐつてことじゃない。いずれだ。でも、考えておくれ」

「……」

紗代は、黙って表に出て行った。

喜助は仕事の手を休め、注文を受ける廓や料亭、屋形を思い出し出していた。芸者衆や女将と話をする機会が多いが、顔馴染みになつてみれば、皆、気の良い連中である。

幕府は人身売買を禁じている。だが、遊女や芸者たちは年季奉公の名目で身売りにされてきた女たちだ。世間様から見れば日陰者。自ら望んでこのような世界に身を置く者などいない。特に遊女のほとんどは身売りされた女たちだ。では芸者はどうなのか。喜助の頭に、二、三人の顔が浮かんだ。芸達者。自分の芸を客に喜んで貰いたい。出来れば芸で身を立てたい。だけど体は売らないよ。確かに自ら望んで芸者になった女も居る。だが、連中は芸達者だから芸者になれたのだ。周りからも別格の扱いを受けている。芸者になるには厳しい稽古が待っている。

喜助は、芸者について得意先の屋形の女将に訊いたことがある。江戸では芸者と呼ぶが上方では芸妓と呼ぶらしい。まず、仕込みから見習いになり半玉に。この半玉も、江戸と上方で呼び方が違う。江戸では、お酌さん、上方は舞妓さん。芸者になるのはその後だ。七年も八年も掛かる。仮に自ら望んで入ったとしても、稽古や衣装などに膨大な金が掛かるため、やはり年季奉公になることが多いと言う。女だけの世界だ。苛めもあるだろうし辛くて逃げ出したくなるだろう。だが、身売りされた女たちは逃げることも出来ない。

紗代は、そのような世界に入りたいと言う。喜助は、ふっと笑った。紗代は手古舞を見て懂れただけだろう。まだ何も知らないのだ。

喜助は、おトヨにはこの事を言わないつもりでいた。紗代は十二歳になつていたが、そのうちに気持ちも変わるだろう。今、駄目だ、駄目だと言うのは止めておこう。

志麻は、女の嗜みとして琴とお茶の稽古に通つていた。

藤次郎は、もう子供は出来ないと思つている。志麻に婿を貰い、堀田家を継がせれば良い。妻の綾乃にも話したが綾乃は頷いた。

「では貴方、志麻にお稽古事でも」

余裕はない。だが武家の娘として、いや婿を貰うのであれば尚更、一通りのこ

とは身に付けさせておきたい。人伝でお琴の師匠琴音を知った藤次郎は、綾乃に志麻を頼むよう言った。琴音は、三味線や太鼓などの弟子も抱え忙しい師匠だった。志麻は琴を弾くのが好きになっていた。習い始めの頃、弦を押さえる指の力加減で音色が変わるのが不思議だった。それに腰を浮かせて押し込んで妙ちきりんな音になってしまいう事があるが、弾いていると心が浮き浮きした。

祭りも終り、普段通りの稽古になっていたがたまたまお弟子さんが少ない日があった。志麻は、琴音に芸者のことを訊いてみた。

「おっしょさん、私も芸者さんになれますか」

琴音は目を見張った。武家の娘が何故……。

「お志麻さん、何で芸者になりたいの」

志麻は、八幡様の祭りで見た手古舞を踊る芸者衆の話をした。琴音は、ほっとした。あの格好に憧れているだけ。子供には良くあることだ。

「芸者さんになるのは大変なのよ。唄や三味線、太鼓が上手でなければ駄目だし、舞の稽古も厳しいのよ。それに行儀作法もきちんと身に付けなければならない。もう少し大人になってから考えても良いと思うわよ」

「……」

「さつ、今日のお稽古は終り」

琴音は芸者上がりだった。

家は貧しく、子供の時に身売りされた。辛い修行の毎日だったが、筋が良かったのか、とんとん拍子に上がっていった。半玉の時には、旦那が付かなかったが、芸者になると何人かの大店の主が身受けしたいと言って来た。

ある茶屋の女将が間に入り、酒間屋の主が旦那になったが、この男は、なった途端に小心者の本性を現した。女房が愠気を起こしたのだ。旦那との間には証文があるため金には不自由しなかったが空しい毎日が続いた。年季が明けると同時に、この旦那は、ぼつくり逝ってしまった。これで後ろ盾はなくなった。芸者は、年季が明ける前に決めなければならぬ事があった。自前で芸者を続けるか、もう一年お札奉公をするか、または芸者を辞めるか……。琴音は悩んだ。自前は屋形に居た時よりも数段も大変である。着物も自分で揃えなければならぬし、余程、芸に磨きを掛けなければお客から声が掛からなくなる。

琴音は、お札奉公の後で芸者を辞めることにした。既に身内はいない。自分ひとりの事を考えれば良い。だが、日々の暮らしがある。そこで弟子を取って芸事を

教えることにした。

家を何処にするか。住み慣れた深川か、近くの本所にするか。琴音は日本橋と八丁堀の間にある家を借りた。此処であれば武家地にも町人地にも近い。忙しい屋形であれば仕込みや見習いの師匠として仕事が入るかも知れない。琴音の思惑は当たった。今は、大勢の弟子を相手に綺麗な毎日を送っている。

「おつしよさん、どうしたのですか」

琴音は志麻が居るのも忘れ、物思いに耽っていた。

「あつ、ご免よ。志麻さん、お父上が許しませんよ」

「何故ですか。そう言えは、お父さまは違う世間だと言っていました。詳しい事は大人になれば判るって」

「まあ、お父上にも話したのですか」

「何で大人にならなければ判らないのですか」

「お志麻さん、相応という言葉があるのを知ってますか。身分相応、歳相応って言うてね。武家の娘さんが芸者になるなんて聞いたことがありません。それに、人間はその歳になれば、その歳に相応して物事が判ってくるものなんです。ね、芸者のことは、もう少し大人になってから考えた方が良いと思いますよ」

琴音は、一つだけ嘘を付いた。武家の娘も遊女や芸者になっっている。お家取り潰しの憂き目に合った武家が喰うのにも困り、娘を身売りした話は幾らでもある。武家の娘は、女の嗜みとして芸事を身に付けていることが多い。地方であれば短い期間で座敷に上げることが出来る。芸事を身に付けていない娘は遊女として廓に入られた。町人などは武家の娘を抱く機会などほとんどない。好色な男たちは武家上がりの遊女を競って買った。売れっ妓の花魁は、廓での格が上がっていく。面白いもので世の中が落ち着きだすと花魁に歌詠みなどを求めるようになる。教養ある武家の娘が太夫にまで上り詰めた話もあるほどだ。

琴音の稽古は、八ツには終る。

この日、志麻は寄り道をした。志麻は大川に架かる花見橋の欄干にもたれ掛かり、川面を見ながら考え事をするのが好きだった。江戸湾に向かって次から次へと絶えることなく流れる大きな水の帯。今は夏。川岸には、うつそうと葦が茂り、川面に覆いかぶさっている。葦雀が葦に留まり燕が飛び交っている。たまに綺麗な翡翠も来る。翡翠は日の光に輝いている。白鷺も優雅な舞を見せてくれる。川面に

目を遣れば、びちちゃんと川魚が水面に飛び跳ねる。鳥や魚たちは自由に生き活きと飛び回り、動き回っている。楽しそうだ。志麻は手古舞を踊る芸者の姿を思い出し、ていた。

——何で芸者さんの話をするよ、皆、大人になってからと言うのだろう。

志麻は、欄干に頬杖を付いて大川を飽かず眺めていた。

ふと見ると、反対側の欄干を見ると女の子がいた。自分と同じように川面を眺めている。志麻は、そつと近付いて行き、少し離れた所で欄干にもたれた。顔を向けると、その子もこつちを見た。

「志麻さん」

「あれ、紗代さん」

二人は顔を見合わせ、にこつと笑った。

「何してるのですか」

「川を見ているの。あたし詰んない事があると此処に来て川を見るの。いつまで経っても流れつて止まらないでしょ。あたし、見ていて飽きないの。志麻さんは」

「私も同じよ。よく此処で考え事をするの」

「でも、今まで会わなかったね」

「そうね。初めて会った時からもう三年…… また会えたわね」

志麻も紗代も妙に嬉しかった。二人は黙り込んで川面を眺めた。どれ程の時間、そのようにしていただろうか。急に二人が顔を上げ、同時に口を開いた。

「考え事って？」

「詰まらない事って？」

二人は笑い出してしまった。そして、どちらが先に話せば良いのだろうかと同じ事を考えた。年上の方が先に話すべきだろう。しかし、同い年。では、生まれ月が早い方が……。だが、二人とも生まれ月を訊きたくなかった。たとえ一日でも遅ければ、相手を立てなければならぬ。それは嫌だった。また二人は黙り込んだ。紗代は、祭りの時のことを気にしていた。志麻に侍の子供は生意気だから嫌と言ったことだ。

「この前、ご免ね。志麻さんはいじめっ子じゃないみたい。ねえ、今日は志麻さんが先に話しなよ。次は、あたし。順番にしようよ」

「いいわね。じゃー話すわよ」

と言ったのは良いが、志麻は気後れがした。大人たちと同じように驚かれるの

ではないか。いや、一緒に手古舞を見たんだし、同い年。ひよっとすると判つてくれるかも知れない。

「わたしね……、芸者さんになるの」

紗代が目丸くした。やはり驚いている。志麻は言わなければ良かったと思つた。紗代が口を開いた。

「あたしも。あたしも芸者さんになるって決めたの！」

今度は志麻が目丸くした。二人は見詰め合った。

藤次郎は、せっかちな男だった。定町廻り同心は、種々雑多な事柄をてきばきと処理しなければ遣つていけない。持ち前の性格だけでなく、毎日の仕事が尚更気の早い男へと変えていた。妻の綾乃は、どちらかと言えはおっとりしている。

「綾乃、もう子供は出来んだろう。まだ先の話だが志麻に婿をとらねばならん。そこで相談だが、同じ同心仲間の佐々木殿に千代松という次男坊がおる。いずれ家を出るはずだ。話を付けておきたいが」

「まあ、志麻はまだ十二ですよ。気の早い……」

「備えあれば憂いなしと言うではないか。このようなことは、早く決めておいた方が良い」

「まあ、憂いだなんて……。ところで先方さんはお幾つですの」

「志麻より二つ上だ。来年には元服する。元服と同時に我が家に通つて貰い、拙者の下で同心見習いをする。何年か後に夫婦になれば良い。どうだ」

綾乃にとり、藤次郎の気の早さは常のこと。別に驚くこともないが、夫婦とは気の早い。考えてみれば、同じ同心の家柄同士。歳は二つ上。領ける話だ。

「一度、先方さんにお目に掛かりたいものです」

「判つた。委細、拙者に任せよう」

言うまでもないこと。藤次郎は相談しているようでいて、いつも自分の思い通りに事を進める。

次の非番の日、志麻の家に二人の客があつた。志麻は、何が何だか判らなかつたが、とにかく、部屋でその二人と会つた。千代松という男の子は、十四歳と言う。

きりつとした顔で大きく澄んだ目をしている。痩せているようだが、よく見ると筋肉質で締まった体付きをしている。そして、志麻をじつと見ていた。志麻も目を合わせたが、何の違和感もなく、自然に振舞うことが出来た。

「では、そう言う事で宜しくお願ひいたします」
「堀田殿、こちらこそ宜しくお願ひいたします。これで拙者も肩の荷が下り申した」
親たちは機嫌良く挨拶し、この日は終わった。

(二)

江戸には、秋の気配が漂い始めていた。薄の穂がふさふさと白く揺れ、其処かしこに、すーいつ、すーいと茜あかねが群れ飛んでいる。燕の姿は疾うにない。蝸ひぐらしのカーナカナカナの鳴き声が、矢鱈と寂しく聞こえる季節である。

琴音は、志麻には歌心があると思った。綾乃からは、お琴をお願いしますと言われた。だが、琴音は三味線や太鼓も教えた。筋の良い子だ。ただの嫁として、家事や子育てだけの女にしてしまうには勿体ない。教えながら、ふと芸者になりたなどの言葉が頭を過ぎってしまう。

——女将の静に相談してみようかしら。あら、あたしは何を余計なことを考えているの。ただのお琴の師匠なのに。

志麻と紗代は、花見橋の上でしばしば会うようになっていた。

志麻は、音曲の面白さを紗代に話した。紗代は焦りを感じていた。父さんは芸者になるには踊りや三味線、太鼓が大変だと言った。自分は何も出来ない。父さんは大変だと言ったのに志麻さんは楽しいと言う。

紗代は、部屋に閉じ籠るようになっていた。喜助やおトヨが声を掛けても空返事だけで外で遊ぼうともしない。おトヨは女の兆しでも、まさか好きな男の子でもと、それとなく気を配ったが違うようだ。別に友達に苛められた様子もない。ただ、部屋で遠くの空を眺めているだけである。

喜助とおトヨが紗代の部屋にいた。

「紗代、どうしたの。最近元気がないじゃないか。父さんも心配してるのよ。紗代は、何でも話してくれる元気な良い娘でしょ。さ、話してちょうだい」

紗代が二人の前に座りなおした。今まで見せたこともないような大人びた顔つき。二人は何事かと思った。喜助は、まさかとは思ったものの悪い予感がした。

「紗代は、芸者さんになります」

おトヨの驚きは凄まじいものだった。目を見開き、仰け反ってしまった。喜助は覚悟を決めざるを得ないと思った。どうやら一時的な憧れではなかったようだ。喜助は、半ば諦め始めていた。おトヨの目から、ぼろぼろと涙が落ちだした。おトヨは涙を拭きもせずに言った。

「紗代っ、駄目です。母さんは絶対に許しません。何のために今まで大事に育ててきたのですか」

おトヨの頭には仲居をやっていた頃の情景が浮かんできていた。客は必ずと言って良いほど芸者に体を求めた。酔えば酔うほどしつこく迫った。芸者とは本来、芸を売るもの。皆、気の良いしつかりした女たちである。でありながら客の求めに応じる芸者が多かった。おトヨは、そう言うものと割り切りたかったが、どうにも許せなかった。仲居であるおトヨに言い寄る客もいた。余りにもくどいため、客を庭に突き落としたこともあった。紗代は、そんなところに行きたいと言う。

「おまえさん、何か言ったらどうなんだい！」

「おトヨ、この子は言い出したら聞かない子だ」

「なに言ってるんだろうね、この人は。じゃーこの店はどうするんだい。紗代に婿を取るんじゃないのかい」

「その積もりだったが……。おトヨ、豊川町の金物屋、甚平って覚えているか」

「覚えてるよ。甚平さんがどうしたって言うんだい。だいいち何でこの場に甚平さんが出てくるのか、あたしには判らないね」

「あそこの三男坊が板前になりたいって言ってるらしい。来てもらおうかと思ってる。出来れば紗代と、とも思っていたが」

「だから、おまえさんは何を……」

おトヨは話を止めた。この人は許す気だ。おトヨの頭の中が真っ白になった。呆けた顔で黙ってしまった。紗代は、ただ手古舞に憧れているだけではなかった。

「紗代、父さんも母さんも反対だが、少し考えさせてくれるかい」

紗代は二人の遣り取りを聞いていたが、許して貰えると思った。

喜助は、おトヨと話し合った。

「身売りする訳じゃない。それに、あの世界は証文が総てだ。しつかりした屋形の女将であれば、紗代を変な道に連れては行かない」

おトヨも紗代の頑固さを知っている。誰に似たんだろなどと頭を捻ることもある。確かに喜助の言うとおりかも知れないが、朱に交わればとも言う。

「女将が見てくれても、紗代がそんな風にならないとは言えないよ」

「話せばいい」

「なに言ってるのさ。まだ子供だよ」

「話すのは今じゃない。分別が付いた頃でいい」

「誰が話すのさ。一端預けたら家になんか戻って来れないよ」

「だから証文次第だと言ってるだろう。月に一日、いやふた月に一日でいい、戻れるようにすりゃーいいんだ」

「おまえさんはそんな風に言うけどね、そんなの無理だよ」

「馬鹿野郎っ！ その無理を通すのが親つてもんだ」

「……」

おトヨもその気になりつつあった。

「ところでおまえさん、紗代は何で芸者って言い出したんだい」

喜助は祭りでの出来事を話した。ただの憧れだと思っていたが違っていたとも話した。芸で身を立てられれば女としては悪くない。

「おまえさん、ちゃんとした結婚はどうなのかねえ」

喜助にも、真面まおもな結婚が出来るかどうかは判らない。

「俺もその事が気になったが、所詮男と女。何が真面で何が真面じゃねえかなんて判らねえ。そうだろう。俺たちだつてこうやっているが、何てことはねえ、俺の勘違いが元で一緒になったようなもんだ。だが今は上手く行つてらあ。違うかい」

「ふふ、そう言われりやそうだね。まったく、おまえさんたらあの時、勘違いしちゃうつてさ」

喜助は絹弥の女将、静に話をもつて行くことにした。

翌日、喜助は紗代に話した。

「紗代、もう少し待ってくれるかい。父さんが屋形の女将さんと話してみるからな。駄目って言われるかも知れないが……」

紗代は嬉しかった。心の中で絶対に駄目にはならないと思った。

花見橋、今度は、志麻が焦りだした。

「紗代さんは、きちんと話したのね」

「だって、あたし一人じゃどうして良いか判らないし。父さんが絹弥の静さんという女将さんに訊いてくれるって言ってくれたの。嬉しかった」

絹弥…… 志麻はこの名前を頭に入れた。場所を聞いたが、紗代は、まだ知ら

ないと言う。志麻は一人で絹弥に行ってみようと思った。

志麻は、琴音に絹弥のことを訊いてみた。琴音は、またまた驚いてしまった。絹弥は琴音が寝起きしていた屋形だ。静は琴音の女将でもあった女。場所を教えるのは容易いことだが、教えて良いのだろうか。親たちは紗代の考えを知らないはず。大勢いる弟子の中の一人とは言え、面倒は起こしたくない。

「志麻さん、絹弥に行つてどうするの」

「芸者にしてもらえるか訊きます」

琴音はふつと笑った。しっかりしているようでまだ子供。

「志麻さん、仕来りしらいりつて言葉、知ってる」

「いいえ。知りません」

「お侍さんにはお侍さんだけに通じる決まり事があるでしょう。例えば…… 刀は体の右側に置かなければならないとか、刀掛けに置く時は鏢くわの方を左側にするとか、芸者さんの周りにもそういう仕来りがいっぱいあるの。志麻さんが一人で行つても話はしてもらえないの」

「では、どうすれば良いのですか」

「ご両親と一緒に絹弥の女将さんに会わなければ駄目なのよ」

志麻の顔が急に曇った。琴音もどうして良いか判らなかつた。

志麻は、町人である紗代が羨ましかつた。自分は、まだ両親に話せないでいる。

武家の娘が我が儘を言うなど怒られるに決まつている。

琴音は、静に会ってみようと思つた。忙しさにかまけ、暑中見舞いにも行つていない。すでに秋に入つていたが、理由は何でも良い、とにかく行ってみよう。

「まあー、久し振りだね。お弟子さんはどうだい」

静は四十に近いが深刺としてゐる。琴音にとり、一時は親代わりでもあった人だ。にこやかに迎えてくれたが、琴音は子供のように身が竦んでしまう。静の落ち着き払つた姿を見ると、まだ自分は苦勞が足りないと思う。二人は四方山話を続けたが、琴音は話の接ぎ穂が見つからないでいた。弟子を取り、何年もが過ぎてゐる。静は自分を師匠として認めてくれてゐる。そんな私が、芸者になりたい武家の娘がいるんだけど、などと切り出せば笑われるに決まつている。いや、馬鹿にされるかも知れない。しかも親の許しを受けていない娘だ。

「琴音姐さん、相変わずあんたは素直な人だねえ。話があるんだろう。顔に嫌っているほど書いてあるよ。今は立派なお師匠さんだ。誰に遠慮をすることがあるって言うんだい。ぐずぐずしてゐるなんて水臭いよ」

琴音は珍しく顔を赤らめた。女将さんには適わない。琴音は名前が出さなかつたが志麻のことを話した。

「ほう、武家の娘かい。八丁堀の同心ねえ。あんた、名前を言わないけど世間は狭いんだよ。同心は大勢居るけどねえ、八丁堀つていやあ捕り方だ。北か南の奉行所勤め。あたしも結構顔が広いんだよ」

静は話が進んだ後で旦那だったんですか、などと言うのは嫌だよと厳しい顔で言った。琴音は、どきつとした。静は話が進んだ後で、と言った。

「女将さん、この話、どう思ってるんですか」

「野暮なことを聞くんじゃないよ。どんな子かは会ってみなければ判らない。甘やかされて育った子供であれば勤まりやしない。だがね、そんなに芸者になりたいと言ってるんだ。それに歌心があるんだろう。いいじゃないか、武家の娘でも。もつとも親御さんが許すかどうかは判らないけどねえ。それに、親は何やかやと証文内容に口を挟むだろう。先方さんが言いたいことは判ってるよ。辰巳芸者が売るのは芸だけだよ」

琴音は、ともかくもほつとした。

「実は親御さんは北町奉行所の定町廻り……」

静がちよつとお待ちよと話を遮った。

「定廻りつて言ったて北と南で六人ずつだよ。皆知ってるよ」

と、同心の名前を挙げた。堀田藤次郎の名前もあった。

「じゃー女将さん、親御さんが会いたいわつて言ってきたら、宜しいですね」

帰りしな、琴音は下を向いて歩いていった。静が言った売るのは芸だけとの言葉が胸に刺さっているのだ。静は、体を売ることを許さなかつた。茶屋の女将が文句を言ってきたこともあるくらいだ。

琴音は呟いた。貧乏は嫌。私はお金が欲しかった……。子供の頃に味わつた、喰うか喰わずの毎日。あんな生活は死んでも嫌だ。今は金に困ることなどないが、いまだにお腹を空かせた夢を見る。

琴音は、静に会つた事を志麻には話さなかつた。でしやばつてはいけない。ましてや私が親に話すなどいつての外だ。まだ子供とは言え、志麻が自分で動くことだ。両親は駄目と言うに決まっている。志麻は諦めるだろうか。いや諦めないだろ

う。ではその時、志麻はどのような手立てを考えるのだろうか。
琴音はどのようなことが起ころうとも、志麻を助けていこうと心に決めた。

(三)

喜助は手土産を持って絹弥の門をくぐった。

今日は仕出しではない。着流しだけでは失礼かと思ひ、羽織を着込んでいる。

まだ八ツ頃、絹弥の奥からは芸者や半玉の笑い声が聞こえてくる。

玄関の前に立つと、庭の方から声を掛けられた。

「あら喜助さん、粧めかし込んでどうしたんだい」

見れば、静が庭を掃いていた。この様なことは滅多にない。屋形の女将はやくざの世界で言えば親分である。

「女将さんが掃除とは…… どうなさったんですか」

「いえねえ、近頃体を動かしてないからね。まあまあ、手土産なんかぶら下げちゃつて、あたしに用かい。まさか家の妓に用事なんてことはないだろうね。あんたは堅物だから」

「へえ、ちよつくら、女将さんに相談してえことがありまして……」

さつき、琴音が帰ったばかりだ。静は、

「今日は、相談事が多い日だねえ」

と呟きながら、喜助を奥へと連れて行った。

静は箱火鉢の前に座り、お前さんもお座りよと言つて熾火おきびをいじり始めた。喜助は緊張しながら静の仕草を見ていた。静は脇に置いてある煙草盆を引き寄せ、煙管を手にとって刻み煙草を器用に詰めている。熾火に煙管を持っていき火を点けた。喜助は煙草を吸わない。味付けが狂うからだ。だが、煙草の匂いは好きだった。知らず知らずの内に鼻をひくつかせてしまう。

「何て顔をしているんだい。犬じゃあるまいに。さてと、お話つてえのをお聞かせいたどうかねえ」

静が煙草を吸いながら伝法な口を利くのは、相手の心を読めないでいる時の癖である。

「へえ、日毎に寒くなりやすねえ」

「何を言ってるんだい。あたしは忙しいんだから早くしておくれ。まさか、お紗代を芸者にしたいなんて言い出すんじゃないだろうね」

喜助は飛び上がった。しまった。

「な、何で知ってるんですかい！」

静の手から煙管が滑り落ちた。

二人は揃って口を開けたまんま見詰め合ってしまった。静にしてみれば琴音の話があつたばかり、冗談のつもりで言つたまでである。しばし呆けた顔の二人であつたが、喜助が口を開いた。

「駄目だつて言つたんですがねえ。言うことを聞かねえんで。どうしても芸者になりてえと……。かかあとも話したんですが、とにかく女将さんに相談してみよう……。まあ、そんな訳でして」

「……」

「ついでには、相談事ですが……」

静は身を起こして普段通りの姿勢になった。

「あなたたちが言いたいことは判っているよ。それについてはあたしが許さないから大丈夫。他にもあるのかい」

「へえ、行つたきりつてえのも何ですから、ふた月に一日くれえは家にと思ひまして」

「何だい、仕来り壊しかい。廓じゃ盆と正月だつて帰れないんだよ。来るつて事になればあたしが親代わり。判っているのかい」

「へえ」

「いずれにしても年季奉公。とは言えねえー、身売りされて来る訳じゃなし。ふた月に一度……。他の妓に示しが付かなくなつては、困るしね……」

静は黙り込んでしまった。喜助は気が気ではない。おトヨに見栄を切つた手前、何とかしてもらいたかつた。

「考えてみれば、まだ紗代と会つてないじゃないか。いいかい、紗代に見込みがないと思つたらこの話はなかつた事になるんだよ」

「へえ」

「ふた月ねえ、三月なら何とかなるかも知れないけど、難しいね……。ま、考えておくよ」

喜助は、すぐさま突っ込んだ。

「ありがとうございます。では明日か明後日、女将さんの都合の良い日を決めてお

くんなさい。紗代とおトヨで参ります」

静は、思わず笑い出してしまった。喜助もおトヨも紗代を芸者にしたいらしい。親たちは大丈夫だ。後は、紗代に根性があるかどうかを見極めるだけだ。

「いいよ。明後日してもらおうか」

喜助は、これ以上此処には余計な事を言ってしまう女将の気分を損ねかねないと思った。喜助が、ではと言いついて立ち上がった。

「喜助さん、あんた、あたしに渡すものがあるんじゃないかい」

喜助は立ったまま頭を掻き、手土産を渡した。

静は、紗代と志麻の証文を同じ内容にしようと思った。

——どんな二人なんだろうね。

静の胸に血が滾るような思いが湧き上がってきた。久し振りに面白くなりそうだねえ。

花見橋の上に、もの思いに耽る志麻がいた。

——皆、大人になれば判ると言う。そんなの変だ。大人になった自分なんて想像もつかない。こうやって川を見てみると、浮き草なんかが流れてくる。多分、流れ着く先は海。でも途中で橋桁に引つ掛かるかも知れないし、沈んじやうかも知れない。そんなこと誰にも判らない。お父さまに明日は晴れますかと聞いても、多分晴れると思うが、はっきりとは判らないよと言って笑う。お母さまには、明日、何が起るか判らないから武士の妻たるもの、心しておけなどと言っている。何を心するのか私には判らないけど……。明日のことも判らないのに大人になればなんて、やはり変だ。今、はっきりと判っているのは私の気持ちだけ。

しかし、志麻は、何故、芸者になりたいのか自分でもきちんと説明することは出来なかった。幾つかの言葉は浮かぶが、これらはこじつけでしかない。でも、志麻は心に決めていた。志麻は、紗代にこの気持ちを伝えたかったが、この日、紗代は来なかった。

紗代は母親が化粧するのを初めて見た。髪も結い直している。どの着物を着て行くのかなどと浮き浮きしている。父親を見れば何やら偉そうに、な、俺に任せれば総て上手く行くだろうなどと腕を組んで言っている。

今日は、絹弥に行く日だ。

「紗代、女将の静さんだ。さつ、ご挨拶をしなさい」

紗代は畳に手をつき、丁寧な頭を下げた。

「紗代です」

静は、紗代の目をじーっと見た。澄んだ綺麗な目をしている。全く臆することなどない。姿勢もしゃんとしている。

「紗代さん、あんた芸者のこと、何も判っていないよね」

「はい」

小賢しい子供は、ほんのちよつとの聞きかじりを喋ろうとする。静は、この子は大丈夫だと思った。

「これからは、紗代と呼ぶよ」

紗代は、きつぱりと頷いた。

「紗代、あんた一人で帰れるね。あたしはお父さんとお母さんに話があるから……。そうだね、三日後においで。この日は大安だ。何も準備なんて要らない。普段着で良いからね。身の回りの小物で、持って来たいものがあつたら持つておいで。こつちに来たら此処の娘になる。あたしが親。いいね」

紗代は花見橋まで走った。志麻に伝えたかった。

絹弥では、静が二人に証文を見せていた。年季奉公は八年。紗代は、十三歳、年季は二十一歳で明けることになる。

「女将さん、八年でいいんですかい」

「あんたたち不満かい」

「いや、これで女将さんの方は……」

「元が取れるかと言いたいのかい。あんたたちも商売人。気になるんだつたら言うけどね、あんたたちへの前払いはない。でも費えは多いよ。稽古をつけたり着物を揃えたり……。しかしねえ、きちんと遣つて貰えれば、こつちにもちゃんとお上がりが残る。売れつ妓になれば、その上がりも増えようと言うもの」

「へえ、ありがとうございます」

二人は証文を隅から隅まで見たが、休みの日については何処にも書いてない。これでは話が違う。静が証文の最後を指差した。其処には追の文字があり、親の急病には見舞いを許すとあつた。

「いいかい、あんたたちは、ふた月に一度ずつ病気になるんだよ。ふた月一度。こ

れは口約束だ。いいね」

二人は畳に頭を擦り付けた。

紗代は、志麻を待ったが来なかった。

同じ頃、八丁堀では藤次郎の大声が響き渡っていた。このように藤次郎が怒鳴るのは初めてのこと。綾乃は般若のような形相になっている。さすがに志麻も怯んでしまった。

「許さん。如何にしても許さん。それほどまでに言うのであれば娘とは思わん。出て……」

ここで藤次郎は言い淀んだ。綾乃が藤次郎の袖を引いて小声で言った。

「貴方、そんなことを言ったら、志麻の思う壺です」

藤次郎は腕を組み、押し黙った。

志麻は花見橋で考えたことを素直に話した。藤次郎は、それとこれは違うと呟いた。

藤次郎は、改めて武家であることを考えた。武家とは格式高く在らねばならぬ。代々家を継ぎ、徳川家に奉公せねばならぬ。武家の娘は夫に尽くし、丈夫な子を産む。そして立派な侍に育てなければならぬ。これは当たり前のことだ。自分は間違っていない。それを志麻は身を鬻ぐ世界に入りたと言っている。選りよって我が愛する娘が。そのようなことは有るまじきこと。

志麻は、押し黙る親たちを見た。

母はげつそりと頬が瘦けたように見えた。父はといえば、まるで一気に年寄になってしまったような様子である。父も母も大好きだ。今、自分が二人を困らせていることは事実だ。しかし、芸者になりたいとの思いを押しやることはできない。

沈鬱な時間が過ぎていく。誰も口を開かない。

藤次郎は、佐々木家との縁組が気になっていた。もしも志麻が花柳界に入ることにならば大変な事態に陥ってしまう。

表から鑄掛屋であろうか、直しー、鑄掛けー何でも直すよー、と売り声が聴こえてくる。藤次郎と綾乃が目を合わせた。思いは同じである。娘との間に輝ひびが入ってしまった。

——何が鑄掛屋だ。何でも直すなどと嘘を言いおって。

「貴方、琴音さんですが……」

綾乃が口を開いた。

「志麻の稽古先を捜している時に、琴音さんは府内きつてのお師匠さんだとおっしゃいましたね。それに芸者上がりと……」

「如何にも。で、何を言いたいのだ」

「一度、話を伺つてもと思ひまして……。貴方は廓などではお遊びになりません。それはそれで嬉しいことですが、料亭などで芸者さんとはお遊びになったことはありますよね。でも、それはお付き合い程度と聞いています」

「綾乃、何を言いたいのじゃ。有体に申せ」

「いえね、どのような処か、私たちは知らないのではないかと……」

志麻の顔が明るくなっていった。

「定町廻り同心に向かつて何を言うか。世俗のことを知らずして同心は勤まらん」

「はい。しかし、ご存知なのは犯罪に関わることばかり……」

「当たり前だ。世の中の悪を取り締まるのが奉行所の役目」

「ほほほ」

綾乃の般若顔は消えていた。女とは割り切るのが早い。

「貴方、琴音さんにお会いしてくださいな」

「何故、拙者なのだ。稽古を頼みにいつたのおぬしじゃ。おぬしが行けばよい。母親であるうが」

結局、藤次郎が行くことになってしまった。

「志麻、おまえは十三歳になった。自分なりの望みを持つのは判る。父は無下に駄目だと怒鳴るつもりはない」

志麻は、さっきは怒鳴つたのにと言いそうになったが止めた。

「おまえの師匠に話を聞いてみる。その上で返事をする。良いな」

志麻は頷いた。

「その時、父と母が駄目だ言ったらどうする」

「はい、諦めます」

志麻は、ふと琴音に予め頼もうかと思つたが止めた。おつしよさんに任せよう。気の早い藤次郎だ。岡っ引きの伊吉が顔を出したのを幸いと、明日は非番とするゆえ奉行所に伝えてくれと言つた。伊吉は、急にどうしたのかと首を傾げながらも、へえ、ようがすと屋敷を出て行つた。

藤次郎は寝つきが良い。命に関わるような捕り物を控えていようが、ぐっすり

と眠ることができる。だが、この夜はまんじりともできなかった。佐々木数衛門の顔が浮かんでくる。自分の面目が潰れるだけではない。ややもすれば江戸中の笑い者になる。数衛門は絶縁を申し出るだろう。それに堀田家はどうなる。自分の代で終らせることなど出来ぬ。一睡も出来ぬまま朝を迎えてしまった。

藤次郎は、八ツ頃琴音のところには着くつもりで屋敷を出た。道すがら玄関で見送った綾乃を思い出した。綾乃は信じられないほどつきりとした顔をしていた。出掛けには、

「娘のこれからのお話です。感情的にならず冷静に。あら、貴方、目脂が」
など言った。気楽なものだ。佐々木との話をどうするつもりなのか。

藤次郎は気が重かった。たまたま面倒な事件は起きていない。これで事件でも起きた日には堪らん。一人言しながら歩いたが、琴音の家にはもうすぐに着く。琴音はお止しなさいと言ってくれるはずだ。何なら琴音に志麻を説得してもらっても良い。

琴音の玄関に立ったが、中からは何も聞こえてこない。稽古は終わっているようだった。

「ご免。北町奉行所同心堀田でござる。琴音殿は居られるか」

名乗った後で気付いたが、役柄は不要であった。癖とは恐ろしいなどと考えていると、はい、今、行きますので声がした。別に知らせなどは入れていない。何と言っても拙者は、同心である。同心が何の用件で…… 琴音は驚くであろう。驚く顔も見てみたい。

玄関の戸が開き琴音が顔を見せた。

「堀田様でいらつしやいますね。どうぞお入りください」

藤次郎は拍子抜けした。全く驚いた様子がない。琴音とは初対面であるが、まるで来るのが当然との感じである。奥の部屋に通されたが、家にはまだ稽古の熱気のようなものが残っていた。琴音のうなじには薄っすらと汗が滲んでいる。

「さあさ、どうぞこちらに」

仕事柄、初めて会う相手を観察してしまう。琴音は、明らかに笑みを浮かべている。いや嬉々としている。藤次郎は薄気味悪さすら感じてしまった。

「実は、ちと訊きたいことがあってな」

「へえ、何でもございましょうか」

ここで藤次郎は、ウホンと咳払いをした。どのように切り出せばよいか考えていなかった。

「他でもない。志麻のことだが…… 筋の方は如何でござるか」
琴音は、くすりと笑った。

「奥様からお琴をと伺っておりましたが、今は三味線や鳴物まで…… 師匠のわたしが驚くほどでございます」

「ほう、では筋は良い方か」

「ええ、お弟子さんの中でも三本の指には入ると思います。私はこのまま続けるべきだと思いますが」

藤次郎は肝心の話に持っていけないでいた。琴音は気を利かせた。

「女としての嗜みは大切だと思いますが、志麻さんの場合は嗜みを超えていると思います。音曲は、奏でている本人が楽しいだけでなく、聴く者の心持も良くいたします。器量を持った者の音曲は多くの人に聴いていただいた方が良く思います。身内の方だけでも宜しいかもしれませんが、それでは余りにも勿体のうございませぬでもその場がありません。私は、幸か不幸か芸者になりまして、お客様に楽しんでいただきましたが」

「……」

「芸者になるのは大変でございます。入った当時は姉さんたちの小間使い。お稽古も、きついものでございます。音が違う、拍子が合わない、姿勢が悪い。その度にお扇子でびしゃり。私は舞の方が苦手として女将さんに突き倒されたこともありませぬ。でも、逃げることは出来ませぬ。いつそ死んでやろうかと思つたほどでした。堀田様、人間とは不思議なもので、少しでも上手くなると嬉しくなっていくものでございます。一度、その喜びを知りますと苦しかったはずのお稽古が楽しくなつて参ります」

琴音は、ここで堀田様、お茶が冷めますよと藤次郎に勧め、自分も茶を啜つた。

「琴音殿は芸者であつたはずだが、辛いことなどはなかつたのか」

「はほほ、口幅つたいことを申しますが、人生に辛いことは付きものでございませぬ。生きていく手立てはいろいろあるませぬねえ。それが商人であつたり職人であつたり、芸者であつたり……。なりたくてなつた人、そうでない人。どちらであつても、それなりに辛いことがあるのでは……。堀田様、お武家様も同じでは」

藤次郎は己の事を考えた。辛いことはある。しかし、拙者は武家に生まれた。ふつと顔を上げて琴音を見た。琴音は涼しそうな顔で藤次郎を見ていた。

藤次郎は、裁けた空気を感ぜだしていた。腹藏なく何でも話しも良いだろう。正していた姿勢を崩した。

「琴音殿、いや琴音、吉原の芸者は決して体を売らんらしいな。だが、辰巳芸者は、芸は売るが身は売らぬと粋がつてはおるが……。拙者には甲斐性がなく経験したこととはないが事実は違ふと聞く。置屋とか茶屋の女将が強いのか」

琴音は、いよいよ来たなと思った。藤次郎の目をじっと見ていたが、藤次郎が小声で続けた。

「それとも…… 芸者自らが決めるのか」

「その総てが当てはまりますが」

「……」

「旦那」

琴音も打ち解けてきた。

「吉原の女郎は春を鬻ぎますが、これはお上ご公認の仕事。芸者は、芸を売るのが仕事。旦那も良くご存知のように、お上は人間の売買は禁じています。でもねえ、そうは行かないのが世の中。年季奉公……、年季って言ってますが内情は借金。皆、早く奉公を終らせたいんです。早く借金を返したい。旦那、芸者の年季奉公の証文には体を売るなんて一切書いてありませんよ」

「……」

「ところで旦那、随分、細かいことをお聞きになりますますが、此度は、お仕事でしこのひなょうか」

琴音は切り込んでみた。

「い、いや仕事のような、そうでないような……」

「よござんすよ。何でもお訊きになってくださいな」

「いや、充分判った。要は、本人次第と考えて良いようじゃな」

「えっ、何がですか」

「いや、こちらの話。ところでおぬしは何処の置屋におったのだ」

「絹弥でございませうが」

「そうか。判った。琴音、礼を言うぞ」

藤次郎は、屋敷に戻ると志麻と綾乃を呼んだ。

「父は許さん」

志麻の顔が真っ青になった。

「志麻、おぬしは武家の娘。芸者になるなどもつての外。良いな」

そう言い残し、藤次郎は部屋を出て行った。自室に戻ると、これで良い。これ

で良いのじゃと一人言した。

その頃、兼松では親子水入らずの夕餉が持たれていた。普段であれば食事はおトヨが作るが、この日は喜助がちよつと贅沢な食事を作った。

翌日、藤次郎の屋敷では大変な事が起こっていた。

志麻が姿を消した。

藤次郎、綾乃、そして喜和の三人で屋敷中を捜したが居ない。藤次郎は、四ツまでに奉行所に出仕しなければならない。綾乃には、琴音の所に、喜和には兼松に行くように言った。途中、自身番に寄り、伊吉にも志麻を捜すように伝えた。だが理由は言わなかった。この日、藤次郎は吟味筋との打ち合わせがあるため、外には出られない。このような時に限つてと思つたが仕事はしなければならない。

喜和の話を聞いた紗代は、絹弥の娘になる日ではあつたが、喜和の手をとり花見橋に走った。だが志麻は居なかつた。志麻とはこの橋でしか会つていない。他に心当たりはなかつた。紗代は、一端、兼松に戻り、両親に挨拶をして絹弥に向かった。志麻さんはどうしたんだろう。それに何処に……。嬉しいはずの日であつたが重い心で歩いた。

絹弥に着くと静の部屋に通された。部屋には静の他に何人かの女がいた。紗代は皆の前に座らされた。

「今日からこの子が絹弥の娘になる。名前は紗代。みんな宜しくね」

紗代は、ぺこりと頭を下げた。その途端、一人が声を掛けた。

「紗代、挨拶はね、きちんと両手を畳に付け、手の甲まで頭を下げるんだよ」

紗代は、にこつと笑い、言われた通りにした。女たちにも笑顔が出た。静が一人一人の名前を言った。仕込みは居ない。紗代一人が仕込みさんと呼ばれることになる。見習いは二人で、半玉は四人。芸者は三人居た。その他に若い女中が二人に婆さんが一人。

紗代は、一人一人と目を合わせたが、一人だけ横を向たままの女がいたが別に気に留めることもなかつた。今日から掃除や雑用、茶屋への使い走り、そして肝心な稽古が始まるが、志麻のことが気掛かりだった。

藤次郎は、この日、吟味筋との打ち合わせが終ると奉行所を出た。自身番に伊吉を捜したが居なかった。藤次郎は仕方なく屋敷に向かった。ひよっとして志麻は戻っているかも知れぬ。そう思うと歩きは早くなる。

「戻った」

玄関に綾乃が飛び出してきた。

「貴方、見つかりましたか」

藤次郎は肩を落とした。まだ戻っていないのか。

藤次郎が部屋に座ると、綾乃が琴音との遣り取りを話した。志麻が居なくなつたと聞いた琴音の驚きは激しく、同時に藤次郎に対して怒りを露にして、

「失礼ですが、お宅の旦那様は人の思いを理解できないお人だ」と言つたという。

翌日になつても志麻は戻らなかった。藤次郎には手立てがなかった。綾乃も同じである。喜和は、とにかく近所を捜してみますと外に出て行つた。勤めを休む訳にはいかない。

藤次郎は、早めに屋敷を出て自身番に寄つた。伊吉がいた。

「どうであつた」

「へえ、全くでして……」

「そうか。今日は定廻りをするが、お前は別の場所を頼む。それに、済まぬが他の岡っ引きにも当たつてくれるか」

「へえ、あつしもその積りでおりやす」

空しい一日が終つた。喜和が夕食を作つたが綾乃も箸をつけないでいる。

藤次郎は琴音に会つた時の話、それに綾乃から聞いた話しを思い浮かべていた。人の思い……。志麻の思いは理解している。芸者風情になりたいなどと。武家に生まれたものは武家の人間として生きなければならぬ。世間体もあるではないか。琴音は、どのような人生であつても、それなりに辛さはあると言つた。当たり前だ。藤次郎は侍である己を考ええた。

侍は世を治める。身分は一番上にある。侍とはお上に忠誠を誓い命を懸けて尽くす。末永く仕えるためには家を守り、継いでいかなければならない。また、庶民を治めるのも侍の仕事だ。戦さなどない平和な世では、恐れられるよりも敬われる

ようでなければならぬ。侍は庶民の範であるべき。貧しくとも侍としての生活態度を示し、侍の誇りを守らなければならない。そのために払う苦勞は並大抵のものではない。名譽、誇りのためには、どのような苦しみや辛さにも耐える。不運にも禄を失ったとしても侍は侍だ。誇りを傷つけられれば切腹の覚悟を持つている。役目をしくじっても切腹が待っている。冤罪で切腹を申し付けられることもある。

藤次郎は、侍とは辛いものだと思改めて感じた。辛くとも誇りを持つて自分は遣っている。自分は、そのように遣っているが……。藤次郎は、そうでもない侍もいることを知っていた。私利私欲に走る者、御法度を軽視する者、侍の食い扶持である米を作る農民や、健気に暮らす庶民を蔑む者……。藤次郎は、このような連中を軽蔑していた。

藤次郎は、ふと顔を上げ、笑い出した。拙者は何を考えているのだ。志麻に侍を求めている。拙者は侍として何の疑問も持たずに生きてきた。何かになりたいなどと考えたこともなかった。だが、志麻は侍ではないではないか。それに芸者になりたいとの強い思いを持つている。自分とは違う。

それに何でことだ。拙者は、健気に生きる芸者たちを芸者風情と蔑んでいるではないか。これでは自分が軽蔑している連中と同じではないか。

「旦那っ！ 旦那っ」

声は、伊吉のものだ。門を叩いている。

藤次郎は、急いで門を開けた。伊吉が飛び込んできた。

「旦那、お嬢様が見つかりました。急いでください」

綾乃と喜和も来た。

「志麻は無事か」

「へえ、ご無事で。ただ疲れ切つていらつしやいます。今、見附の番小屋で休んでおいでとのことだ」

「見附、何処の見附だ」

「四谷っ」

「四谷見附……。何でそのような所に」

「旦那、急いでください」

藤次郎が振り向くと、綾乃が両刀を袖に持つてきた。

「貴方、急いで」

「おう、行つてくる」

四谷見附までは、急いでも半刻以上掛かる。藤次郎は、もどかしさを感じなが

らも伊吉に訊いた。

「伊吉、事情を話してくれ」

「へえ、七ツ頃、見附の足輕が番小屋から出ると草むらに人が倒れている。見れば子供。余程疲れていたようで一人では立てない。そこで小屋に寝かしたそう。名前を聞けば小さな声で志麻と答えた。家とは訊いたそうですが、答えなかったとか」

「答えなかったのか」

「へえ。それつきり黙り込んだそう」

「しかし、良く知らせが入ったな」

「いやあ、蛇の道は蛇です。一応、外廓門には伝を使って知らせて置きやしたんで」

「済まぬ。礼を言う」

藤次郎は気になっていた。志麻は何故苗字を言わなかったのか。

四谷見附に着くと番小屋を叩いた。さすがに二人とも息が上がっていた。水が呑みたいが、すぐに志乃が寝ている部屋に入った。二人が部屋にはいると、志乃が目を開けた。志麻は藤次郎を見ると、にこっと笑った。目には涙が溜まっている。藤次郎は込み上げてくるものを感じた。

「志麻……」

言うなり、志麻を抱き上げた。志麻は声を上げて泣き出した。

「志麻、さっ、家に帰ろう」

志麻は、小さく頷いた。藤次郎は志麻を背負い番小屋の連中に礼を言った。すでに五ツだが、町木戸が閉まる前には戻れるだろう。辺りは真っ暗だ。伊吉が番小屋から提灯を借りた。

「旦那、お供いたしやす」

藤次郎は伊吉の心遣いが嬉しかった。藤次郎は背中の中の志麻に声を掛けたが返事がない。余程疲れたのであろう。それに安堵感からか、志麻は眠っているようだ。伊吉は普段から口数の少ない男だが、この夜も黙って提灯をかざし先導している。藤次郎の目には涙が溜まり、零れ落ちた。やたらと涙が流れる。藤次郎は涙声を気にせず伊吉に言った。

「伊吉、志麻は芸者になる」

「えっ！ 旦那……」

伊吉は切れの伊吉と渾名される岡っ引き。頭の中で状況をまとめた。そうか、お嬢様はそれで……。

「お許しになるんですか」

「許す」

「旦那、余計なことかも知れやせんが、佐々木様には何とおつしやるおつもりで」「ま、土下座であらうな。頭が痛い。だが志麻が望むことを叶えてやりたいと、考えが変わった」

藤次郎は伊吉に今までの経緯を語った。伊吉が持つ提灯が大きく揺れた。

藤次郎は気が早い。屋敷に着くと伊吉に礼を言い、併せて数衛門への伝言を頼んでいた。綾乃と喜和は門の前で待っていたが、志麻を見ると二人は手を取り合つて泣いた。

翌朝、志麻は、まだ寝ているようだ。藤次郎は志麻の寝顔を見た。志麻に語りかけた。

——好きに生きよ。父は見守る。

志麻は朝餉前に目を覚ました。三人の前に喜和が膳を持ってきた。静かに食事が終った。

「喜和、此処にいてくれ。おまえにも心配を掛けたな。ところで志麻、話してはくれぬか」

志麻は、姿勢を正して語りだした。

約束通り芸者を諦めようと思った。だが、そうすると自分には何もなくなってしまう。何も無くなつた自分を想像したが怖くなってしまった。そして頭の中が空っぽになった。気が付くと外を歩いていた。家に戻れば、また芸者のことが思い出される。両親との約束を守るには、この事を忘れなければならない。何処かに行けば忘れられる。しかし、何処に行けば良いか判らない。何も食わずに町を彷徨った。日が陰り出した頃、大きな門が見えた。この門の向こうに行こう。何かあるかも知れない。そう思った途端、気を失つたらしい。男の人に声を掛けられた。名前は言つた。家はと聞かれたが、また芸者のことが思い出され、口を噤んだ。それに両親に迷惑が掛かると思った。藤次郎と綾乃のことは彷徨いながらも頭から離れることはなかった。何やら騒がしいので目を開けた。其処には父の顔があった。無性に嬉しかった。

綾乃と喜和は、着物の袖で涙を拭いている。

「志麻、武士に二言はないという言葉を知っているな」

志麻は、小さく頷いた。

「あつてはならぬことだが、此度だけ、父はこれを破る。志麻、好きに生きよ。だが、途中で逃げだしたりすることは許さん」

志麻の目に精気が甦ってきた。志麻は、一言、はつきりと言った。

「はい」

藤次郎は、綾乃と志麻に自分は段取りを知らん。二人で琴音のところに行き、段取りを訊けと言った。

藤次郎は、佐々木家に行かねばならなかった。綾乃と志麻は、一緒に行くと言ったが、藤次郎は一人で佐々木の門を叩いた。

藤次郎の前に数衛門と千代松がいる。

藤次郎は、話し終えると二人の前に手をつき深々と頭を下げた。顔を上げると真つ赤になった数衛門の顔があった。

「何と言うことを……。堀田殿、貴殿、ご自分が、今、何を話されたかお判りになつておるのか」

「如何にも」

「有るまじき事じゃ。いやこのようなこと、聞いたたぶ験しがない」

数衛門は頭をゆらゆらさせている。数衛門には全く理解できない事なのだ。藤次郎は当然だと思つた。逆の立場であれば自分は何を仕出かすか判らない。それ程の驚きであろう。

「拙者の方からお願ひした話でありながら、このように頭を下げる事態。面目も何もござらん。如何ように申されようが、心してお伺ひいたす。愚かな親と思われよう。世間から誇りたぶを受けるやも知れませぬ。だが、娘を一人の人間として見た時、その思いを遂げさせたいと思うのも、また親でござる。佐々木殿や千代松殿に対し、どうのこうのという理由ではござらん。千代松殿を婿として願う気持ちに変わりはござらん。拙者、今でも良き縁と信じております」

数衛門の怒りは収まっていない。

「良き縁とは聞いて呆れるわ。もつとも、この段階でこのような事態に至ったとは不幸中の幸いとも言える。物事が進んだ後では取り返しが付かんところじやった。宜しい、総て無かつた事といたしましょう。堀田殿、親しいお付き合い、これまで

ですな」

「まことに面目次第もござらん。忝いお言葉。藤次郎、傷み入りまする」

藤次郎は、畳に頭を磨りつけて挨拶をした。

では、と立ち上がろうとしたが、今まで何も言わなかった千代松が口を開いた。

数衛門も驚いて千代松を見た。

「恐れ入りますが、私めに関する事にございます。お二人は納得されたご様子ですが、私には合点がいきませぬ」

二人は顔を見合わせた。人間とは面白いもので共通の思いを抱くと今までの感情的な気分が失せ、仲間意識が芽生えてしまう。数衛門が落ち着かない口振りであった。

「千代松、構わん。何でも申してみよ」

「ありがたき幸せ。此度のお話、私は両家の事情に依るものと思っております。私は次男ゆえ、他家に入る以外、独立する道はございません。いわば佐々木家にとり厄介者」

「千代松、いつ父がその様なことを申した。口を慎め！」

「申し訳ございません。片や堀田様にはご子息がおられない。そこで私めを。如何でしょうか」

二人は、如何にもと頷いた。

「さらに、ゆくゆくは志麻殿と夫婦に。如何でしょうか」

千代松は、いちいち確認する。面倒とは思ふものの、これまた二人は頷いた。

「志麻殿にお会いいたしました。ご自分をお持ちのお方と感じました。今でも素敵なお方だと思っております。武家は家を守り、継いで行かなければなりません。両家の事情により、当主同士が婚姻相手を決める。このことは当然のことと思いません。しかし、出来得れば、好ましいと思うお方と一緒にになりたいと願うのも当然と思いません。如何でしょうか」

一応、二人は頷いたが、数衛門が言った。

「いちいち確認せんでも良い。さつさと話しを続ける！」

「はい。志麻殿が私を好ましいと思われたのであれば、私にとつては幸せなことですが、それは全く判りません。いずれにいたしましても夫婦になるなら先の話。如何……。いえ話を進めます。父上、堀田様、私が志麻殿と夫婦になる件と、お家の事情とどちらが重要なのでございましょうか」

そのように問われれば答えは簡単である。二人同時に声を上げた。

「家じゃ」

「でしたら片方の縁、私が堀田家にて同心見習いをするとの件は、残るのではないのでしょうか。志麻殿と私の婚姻については、まだ約してはいないことですし」

千代松の言う通りであった。

志麻との婚姻については言葉に出してはいない。約したのは、千代松が元服後、堀田家にて同心見習いをするとの話しだけであった。

藤次郎と数衛門は、腕を組んで考えている。

「堀田殿、如何でござろう。先ほど拙者が申したこと、無かったことに……」

「そ、そうでござるな。佐々木殿、拙者は何も聞いておらんかった……」

急に千代松が数衛門に向かい、お願いがございまずと頭を下げた。

「父上、千代松は明日からでも堀田家にて同心見習いをしようございます。ついては……」

「千代松、すぐに堀田家の養子になりたいと言うのか」

「いえ違います。佐々木の名前にて……しかし、いざれ養子として迎えていただきたいと思っておりますが……」

「何じゃ、話が合わんではないか」

藤次郎は、千代松が志麻に惚れたのではと思った。今、養子になれば志麻とは兄妹になってしまう。これでは夫婦になるのは難しい。いざれとは、志麻の気持ちを確かめてからということ。志麻が、千代松を好むのであれば、いや、夫婦になれるのであれば、その時に婿として入れれば良い。志麻と夫婦になれないのであれば、その段階で養子に入る。しかし、この場合は堀田家を継ぐだけである。藤次郎は千代松を不憫だと思った。と同時に好きになった。

「数衛門殿、千代松殿には何か考えがあるのであろう。いざれにしても堀田家を継いでもらえるとのこと。拙者にとつては嬉しい限り」

「うーん、ま、何事も急いでは何事と申すが、では、そのように致しますか。千代松、明日と言うのも何だ、大安の日が良いのではないか」

話は、これで終わったように思えたが、千代松の顔はまだ強張^{こわば}っている。

「父上も堀田様も、ご自分が話されたことをお忘れのようでございます。先日のお話では、私の元服に合わせてということでした。前髪を付けたまま同心見習いも可笑しなもの」

確かにそうである。

「父上、急ぎ千代松の元服をお願いいたします」

將軍家、大名家では十五歳で元服するが、これは別に決まっている訳ではなく慣例でしかない。武家もこれに合わせているだけであり、事情によつては、十二、三歳で元服することもある。

「千代松、委細承知した。よくぞ此処まで言い切れる男になった。父は嬉しい。だがな、明日、明後日すぐにといい訳にはいかん。急ぎ段取りする」

千代松が嬉しそうに頭を下げた。

数衛門は、同僚に烏帽子親を頼んだ。元服には藤次郎も同席した。前髪を落とし、月代を綺麗に剃られた千代松は、凛々しい侍であつた。通称、名は、あざな卯門。実名、諱は影清。佐々木卯門影清が誕生した。

志麻の方も着々と話が進んでいた。

琴音は、自分の事のように喜んだ。だが藤次郎に対する皮肉も忘れてはいなかった。

「そんな目に会わせて、もしもの事があつたらどうするお積りだったんでしょうね。お父上はお堅すぎます。町では話の判る旦那と言われているようですが、娘のことになるとコンコンチキ。ま、それが父親でしようけどね」

琴音は、既に絹弥の静には話を通してある。志麻は両親と共に絹弥に行かなければならぬ。静は藤次郎を知っていると聞いた。藤次郎はどうなのであるうか。藤次郎の非番の日を聞き、段取りをつけた。

その日、絹弥での話ほとんどん拍子で進んだ。静の部屋を紗代が覗いた。志麻と紗代が顔を見合わせ、ニコツと笑った。証文内容に目を通した藤次郎が拙者は病氣などせん。見舞いなど不要と言つたが静は無視した。琴音も同席していたが相変わらずの石頭と顔を顰めた。

志麻は身の回りの整理をしていた。父は箆筍にある着物などは綾乃の部屋に移せと言つた。小物は絹弥に持っていく。志麻が身の回りを整理し終わった時だった。玄関から声が聞こえた。誰か来たようだ。綾乃も喜和もない。

「はい」

志麻は玄関に行き戸を開けた。

其処には、すつきりとした若侍が立っていた。手には大きな風呂敷包みを持つ

ている。見覚えのある顔だが誰だったか思い出せない。

「堀田様はご在宅でしょうか。佐々木卯門が参ったとお伝えいただきたい」

佐々木…… 志麻は思い出した。だが、声を聴くのは初めてだった。

「はい、少々……。いえ、お上がりください」

志麻は、卯門を藤次郎の部屋に案内した。

——あの人、元服なさったのだ。ふふ、前髪を落とした方が素敵。

「おう、よく来たな。佐々木卯門、改めて紹介するが、これが娘の志麻じや。志麻は明日、この家を出る。おぬしは志麻の部屋を使え。その時から住み込みの同心見習いだ」

「はい。宜しくお願いたします」

「志麻、これでおぬしは戻ってこようと思っても、部屋がないことになる。良いな」
こう言うと、藤次郎は大声を上げて笑った。二人は呆気にとられたが、顔を見合せて笑った。志麻は卯門を部屋に案内した。

綺麗に片付いた部屋。既に自分の物がない部屋を見ると、かえって今までのことが思い出されてくる。知らず知らずのうちに目には涙が溜まっていた。卯門は志麻の涙に気付いたが何も言わなかった。

「綺麗なお部屋だ。拙者が汚してはいけませんな。志麻殿が戻られた時に叱られます」

卯門は、初めて拙者と言ったが、何やらこそばゆい思いがした。

「いえ、ご自由にお使いくださいまし。その時はその時でござます」

その時は、その時……。

二人は、暫し見詰め合っていた。

(五)

志麻と紗代は嫌な顔一つ見せずに雑用や使い走りなどを遣った。

茶儀や言葉遣い、作法など、二人の呑み込みは早く、まったく問題はなかった。

芸者になるには総ての芸事を身に付けなければならない。自然、稽古も厳しいものになる。二人は競うように稽古をした。当然ながら、音曲に関しては志麻に一日の長があった。

まだ、ふた月ほどしか経っていないが、志麻の三味線や鳴物、唄は見世出しが出来るようになっていた。だが舞の方はまだ掛かりそうだ。紗代の方は身のこなしが良く、舞はもううちよつとで見世出しできそうだ。唄や太鼓などの鳴物の上達も早いが三味線が遅かった。

静は改めて二人を見た。一人とも中肉中背で似ている。紗代は丸顔で眼が大きく、唇はぼてつりとして明るい感じがする。物言いもしゃきしゃきしている。江戸っ子気質丸出しの町娘風だ。志麻は少し痩せた感じがする。瓜実顔で目は細く切れている。唇も薄い。所作などは控えめで物言いも静かだ。何年か経てば深川には珍しい淑やかな辰巳芸者になるかも知れぬ。だが気の強さは二人とも引けをとらなかつた。静は良い娘たちが来てくれたものだと思密かに喜んでいたが、皆の前ではおくびにも出さず、口喧しい女将で通っていた。静は志麻を地方、紗代を立方たちかたとして仕込むことにした。二人には話していないが組ませてみようと思っていた。

仕出屋兼松には、板前見習いとして金物屋甚平の三男坊、三吉が住み込みで来ていた。三吉は十三歳。いくら実家で包丁を使っていたとは言え、所詮素人。喜助は洗い方から始めさせた。三吉は、へえ、へえと何でも言うことを聞くが、何故だか自分に入り込んでこない三吉を感じていた。

佐々木右門影清の同心見習いが始まっていた。藤次郎は、関係するであろう町役人たちに卯門を紹介した。まずは顔を覚えてもらわなければならないからだ。町年寄にも会わせようかと思つたが、まだ見習いであり、急ぐことはないと思つた。町年寄は奉行所と庶民を取り持つ重要な役目を担っており、その権限も大きい。幕府は広い屋敷を貸し与えているが手当てはない。彼らは商人たちに土地を貸して費えを賄っている。庶民に対する奉行からの通達などは町年寄を通して行なわれる。定町廻り同心にとり、町年寄の存在は大きいものだが、むしろ町年寄の下にいる町名主との付き合ひの方が多し。何人かの町名主に卯門を会わせた。彼らは、こぞつて志麻の許婚いよかけかと訊いた。善意での問いではあるが、藤次郎は、いや違つたとしか答えなかつた。

次に自身番である。

定町廻りは決まった経路をほぼ同じ時刻に廻る。自身番に詰める月行事は月ごとに替わる。家主たちによる五人組だが、簡単には覚えられない。藤次郎は、ゆっくり覚えていけば良いと卯門に言つた。一廻りした後、卯門が訊いた。

「堀田様、毎日でございますか」

「ん、何がだ」

「毎日、このように廻るのでございますか」

「如何にも。何故じゃ」

「月交替もなく、毎日……」

「おぬしもくどいな。これが定廻りじゃ。非番の日は、他の定廻りとの兼ね合いで決める。何しろこの広いお江戸を十二人で見なければならんのだ。粹でいなせな定廻りなどと言われおるがな。どうした、怖気付いたか」

「何の此れしき。ただ草履が堪りません」

「わっはっはー」

藤次郎は声を上げて笑った。

「卯門、我らは何日か置きに大店も見廻る。草履問屋も見廻りの一つ。草履が古くなれば、こちらが断つても、連中は勝手に新しい草履と取り替えてしまう。もつとも拙者、断つたことはないが」

「成る程、そういうものなのです。しかし、何やら賄賂っぽい感じもいたします
が」

「何を言うか。幕府は、商売を許す代わりに株仲間から冥加金を取っておるではないか。その一部と考えれば問題はない」

卯門は、ちと違うのではと言おうとしたが止めた。

「卯門、明らかな賄賂は受け取ってはならぬ。捜査に絡む店が必ず何かを持ってくる。これは賄賂だ。額も大きく、涎が出る。だが、これはいかん。こまいお握り程度であれば構わん」

卯門は、岡っ引き伊吉や下っ引きたちとも打ち解けていった。

何日か経つと、藤次郎は二日置きに卯門の一人歩きを許した。二人は時刻をずらせて廻る。見習いとは言っても半羽織に朱房の十手。庶民は、既に常町廻り同心と見る。卯門にとり一人歩きの日には緊張の連続であったが、生き甲斐を感じ出していた。

(六)

静は、そろそろ志麻と紗代の見世出しをと考えていた。

見世出しは二人のお披露目である。いろいろと決め事や頼み事が多いが、本人たちのこれから、屋形のこれからは懸かる大切なことである。静は置屋と茶屋の寄り合い世話役に声を掛けた。二人の芸を見てもらい、まず半玉になる許しを受けなければならぬ。

寄り合いは株仲間に似ているが幕府公認ではないし独占権などもない。だが、勝手に辰巳芸者とか深川芸者とか名乗られては困るとの思惑、さらに置屋や茶屋の乱立を防ぐために作られている。寄り合いを通さなければ深川では遣つていけない。

静は同じ日に茶屋磯部の女将に会った。見習い茶屋を頼むためだ。女将の加寿代は快く引き受けてくれた。志麻と紗代は此処で一カ月ほど見習いさんとして過ごすことになる。

「お静さん、姉芸者は誰にするんだい。本当はあたしが決めても良いんだけど……あなた、もう決めてるんだらう」

「ええ、紗代には桃若、志麻には千代を姉芸者にと考えています。加寿代さん、仲人を宜しくね」

「あたしは構わないよ。ところでお静さん、歌舞練場で志麻と紗代を見たけど、あなた二人を組にして売り出すんじゃないかい」

「おほほ、姐さんには敵わないわね。その通りよ」

「ちよいと訊いておきたいことがあるんだけど、いいかい」

「まあ、姐さんらしくもない。遠慮なんて止めてくださいな」

「姉芸者との仲人はともかく……旦那だけどねえ、あなた、どう思ってるんだい。あの妓たちは入り方が違うんだらう」

「ええ。互いに惚れ合つて契りを結ぶのであれば構わないけど、お金のために結びつけるつもりはありません」

「そうかい。じゃー、そつちの方は考えないでおくよ」

何故かいつもと違い、加寿代の言い様がしゃきつとしない。

「姐さん、今日は何だか変だよ。奥歯に物が挟まったような感じだけどねえ」

「いえね、変な噂を聞いたもんだから……」

「言つておくれよ」

「桃若だけど、お座敷に身入れてないらしいんだよ。旦那とうまくいつてないんじゃないか、なんてね」

「あらつ、すーさんとは上手くいつてると思つてますよ」

「そうかい。でもね、気を付けた方がいいよ」

歌舞練場での評判は上々だった。世話役たちは志麻と紗代を気に入った。

静は、志麻と紗代を部屋に座らせた。そして桃若と千代を呼び姉妹になるよと伝えた。

「二人とも、もう雑用なんかしちや駄目だよ。手が荒れた芸者なんていないんだからね。お客様には浮世を楽しんでもらうんだ。所帯染みたところなんか見せちゃいけない。いいね」

話しながら桃若を見たが、心此処になしとも感じられる様子である。静は加寿代の言葉が気になってきた。

加寿代は、二人にお座敷での仕来りや所作などを教えた。躰や稽古も本番さながらのものであり厳しいものだった。加寿代は、半玉姿の二人も可愛いと思ったが、試しに江戸褌エドハコを着せてみた。やはり、こちらの方が振袖よりも遙かに似合う。加寿代は、この二人は芸者姿の方が売れると思った。

芸者になるには、普通四、五年半玉をやった後なのだが別に決まりはない。既に志麻は地方として通用するし、同じように紗代は立方として問題ない。静は二人を組ませると言っていた。加寿代は、早く見世出しをと思った。茶屋にとつては早い方が良い。しかも芸者姿で。

お盃も歌舞練場で行なわれた。加寿代の仲人で志麻は千代と紗代は桃若と盃を交わした。志麻は、千代から一字をとり千鳥に、紗代は桃若の若をとり梅若に。二人の芸者名が披露された。盃は集った寄り合い世話役、姉芸者の姉妹筋の芸者、半玉たちとも交わされた。

黒紋付きに身を包み、髪は見世出しの割れしのぶ。二人の姿は皆の目を奪った。これから見習いさんだと言うのに、初々しい二人には既に小粋な女があった。

二人にはまだ慌しい日々が続く。見世出しは、姉芸者と共にする。お茶屋への挨拶廻りやお座敷でのお披露目。姉芸者の最上客などからは、既に何件もお座敷が掛かっている。

「梅若さん。ふふ」

「はい。千鳥さん、何かご用でもおありですか」

「何だか、自分じゃないみたいね」

「でも、この名前に慣れないとね。お座敷で声を掛けられも気付かなかったなんてことになったら大変よ」

「明日から姉さんと一緒に見世出し。どんなお茶屋さんなのか、お客さんはどのよな人たちなのか……。何だか心が躍るけど、ちよつと心配」

「あら、何が心配なの」

「私、舞は苦手。体が硬いんじゃないかと思うの」

「あたしは三味線。音が取れないんだもの」

「組んでお仕事できるなんて、私、ほつとしてるの」

静の部屋に桃若がいた。

「梅若と姉妹になったのは良いけれど…… 女将さん変ですよ。梅若と千鳥は組んでお座敷に上がるんですよ。これじゃー、千代さんも一緒ということになりますよ。どこのお座敷にも四人でぞろぞろ」

「良いじゃないか。あの妓は筋も良いし覚えも早い。手間は掛からないよ。でも、見世出しだけはちゃんとやっておくれよ。梅若だけじゃない、この屋形にとつても大切なことなんだからね」

「……」

膨れっ面で桃若は出て行った。

静は加寿代の話の思い出し、顔を曇らせた。桃若を紗代の姉芸者にしたが、二人とも千代に付ければ良かったのかとも思った。だが、すでに盃は交わしている。余程のことがない限り盃を返すことなど出来ない。

いよいよ挨拶廻りだ。半だらの帯で表に出る。後ろから静が切り火をした。

「左足から玄関を出るんだよ。縁起ものだからね」

おこぼにはまだ慣れていない。二人は顔を見合わせ、ちよつとしかめっ面をした。

見習いさんが二人に姉芸者が二人の挨拶。茶屋や客は喜んだ。お座敷は、挨拶が主であるため短い時間で終る。とは言え、客は二人の芸だけでなく千代や桃若にも声を掛けた。千代は、そうですかと愛想よく舞った。客は、さすが違うねえ、と年季の重さを褒めた。だが、桃若は違った。あたしは、介添えですからと頑なに拒んだ。そんな姉芸者を見ると、紗代は辛かった。

あわたた 慌しい見世出しは三日ほどで終った。二人は半玉となったが、稽古事も益々

厳しくなっていた。唄は長唄、小唄、端唄、常磐津、清元。太鼓や三味線の他に笛

や琴も稽古する。だが稽古だけに専念することは出来ない。数は少ないが、お座敷が掛かれば行かなければならない。まだ、半分しか玉代をもらえない半玉。臙負もできていない。

稽古の間をぬってお茶屋さん廻りもする。客に売り込んでもらうためだ。

千代は志麻に挨拶廻りについて事細かく教えた。時間が空けば一緒に廻ってくれた。だが、桃若は違った。紗代に対し、お座成りとも思える接し方かしない。当初、自分は嫌われているのではと紗代は思ったが、そうではないらしい。桃若は千代や他の芸者たちとの遣り取りでも同じようであった。

「千鳥さん、今日も桃若姉さんは何も言ってくれなかったの」

「ええ、そうなの」

「私ねえ、千代姉さんに訊いてみたの。そうしたら桃若さん、以前は違ってたんだって。面倒見は良いし、それに臙負さんも大勢いたらしいの」

静は桃若のことが気掛かりだった。

桃若は辰巳芸者の名を欲しいままにしていた芸者だったが、近頃声が掛からなくなつたのだ。旦那との仲人をしてくれた女将に訊いてみたが、旦那の杉造も心配しているらしいと言う。静は思い切つて桃若に訊いてみた。

「女将さん、あたしはもうすぐ年季が明けます。もう借りは返したと思つていますよ。いえ、それ以上のことはしたつもりです。あたしが居るのが迷惑なら、そのように……。ただし、その時は年季を明けたことにしてくださいな」

「ところで、明けたら、あんた、どうするんだい」

「女将さん、そこまで心配してくださなくても結構ですよ。どうせ鼻つまみ者のあたしだし、自前は無理。芸者なんて辞めるつもりですよ」

取り付く島もない。屋形に与える影響も良くない。年季ね……。静は、どうするか考えることにした。

年季が明ければ、きちんと世話になつた茶屋や女将さん、芸者仲間を引き祝いをする。これを怠ると、この世界に不義理をして辞めたことになってしまう。白蒸しも配る。中のおこわが白ければ、もう戻りませんとの意思表示。赤ければ、また戻るかもしれません。その時は宜しくとの意味がある。

静は、置屋の世話役に訊きに行った。

「お静さん、あんた相談に来るのが遅いよ」

世話役は何故そうなったのかは知らないよ、と前置きした上で話しました。「心を込めて客を接待しない芸者は、それだけで義理を欠いたことになる。そんな芸者は辰巳芸者の名を汚すだけ。年季などどうでも良い。直ぐ辞めさせなさい」相談とは自分が決めかねているから人に持ち掛けるもの。静は、世話役の意見に従うことにした。

静は桃若に慰労金を出した。だが、桃若は金なら心配ありませんよと受け取らなかつた。何故このような女になってしまったのか、静は知りたかつた。しかし、桃若は何も話してはくれない。桃若は畳痕から貰つた着物や小物をまとめた。

寂しい別れだつた。玄関を出る桃若を見送つたのは、紗代だけだつた。桃若は玄関を出たが、振り返つて紗代を手招きした。

「あんたには済まなかつたね。姉さんらしい事は何にも出来なかつた。でもね、一つだけ言つて置くよ。男には気をつけなよ。女つてのはね、頭では駄目だと判つていても、ずるずる行つちやうもんだからね。あんたなら大丈夫だと思ふけど……」

(七)

見世出しから一年半ほどが経つた。

二人には茶屋から声が掛かるようになっていた。畳痕とはいえないが何人かのお客も付いた。客たちには年配者が多く、いわゆる通と呼ばれる旦那連中だつた。

静は喜んだが困つたことがあつた。茶屋の女将が芸者姿で来てくれという。静は何人かの女将に訊いてみたが女将たちは口を揃えて、客がそうしてくれつて、と言う。お客さまあつての商売だ。しかも誰もが通と認める客たちの求めだが、仕来りもある。江戸棲を着せて上に道行きでも着せれば外では判らないよ、などという女将もいるが、そもいかない。半玉は雪が降る真冬であろうが羽織すら着ない。

静は二人の髪型をおふくにした。本来であれば旦那が付き、水揚げと同時に鬘替え儀式を行ないおふくにする。だが二人に旦那を持たせるつもりはない。多少気にはなつたが、おふくにすれば簪も地味になるし衿元の朱色も消える。一文字にしていく帯揚げは結んで帯に入れる。こうすると何となく胸元がふつくらと見える。お客は、まあ我慢しましょうと言つてくれた。連中にしても半玉から芸者に成長していく姿を見るのが楽しみであり、育てたのは自分だと自慢したいところがあるのだ。

喜助とおトヨの二人だが、ふた月おきにきちんと病気になった。小僧を絹弥に行かせる。静は小僧に言う。

「判つたよ。よく風邪をひく夫婦だねえ。でも腹痛は起こさない。仕出屋だからって都合よく風邪だけ……。約束を守ることは大切だけど、笑っちゃうね」

紗代も兼松に帰るのは楽しかった。地味なつぶし島田でいそいそと帰る。界限では梅若の名前も売れ出している。道すがら、よつ、梅若姐さんなどと声を掛けられることもあるが、やはり嬉しい。

喜助もおトヨも梅若とは呼ばない。やはり紗代だ。おトヨは、大変なんだろうねえと、いつも涙顔になる。そして嫌な客は居るかい。いいんだよ蹴飛ばしたって、などと強い口調で言う。喜助は心配などしていなかった。男とは女の中に、ちょっとでもだらしなさを見つけると其処につけ込んでいくものだ。本人は気付いていないだろうが紗代にはそのような隙がなかった。

紗代は三吉にも会った。喜助によれば、まだお造りには進んでいないが腕を磨いていると言う。確かに包丁を持つ姿には厳しいものがあつた。三吉は紗代に顔を向けたが、頭を軽く下げただけで俎板に向いた。悪い印象でないが内に籠る感じである。包丁一本に命を賭ける男とはこのようなものなのかと紗代は思った。

紗代の話を聞くと志麻もたまには実家にと思つてしまふ。志麻は、まだ一度も戻っていなかった。父のことだ、意地を張っているのだろう。しかし、母や喜和はどうなのだろうと思つていた矢先、絹弥に喜和が来た。綾乃が寝込んだという。静は、あらまあ、やつと病気になつたねなどと笑つた。

志麻は、久しぶりに実家に行った。

やはり実家は心が和む。志麻が家に入ると綾乃は本当に寝込んでいた。喜和が布団の横に座っている。志麻は心配して喜和に聞いた。

「何処が悪いの」

喜和は何も言わないで奥の方に行った。志麻の胸が高鳴つた。重いのだろうか。喜和が戻ってきた。

「奥様、もう大丈夫ですよ」

「そうかい」

言うなり、綾乃がガバツと身を起こした。志麻は呆れてしまった。

「お母さま、驚かさないでくださいよ」

「志麻、こうでもしないとお父さんが駄目なのよ。いいわね、私は病気なんですか

らね」

二人は。どのような稽古をしたのか、お座敷はどうなのとくどいように志麻に訊いた。三人の楽しい時間が過ぎていった。

玄関で声がした。喜和が席を立ったが、すぐに戻ってきた。

「奥様、卯門様です。旦那様から頼まれたって……」

「何を」

「お見舞いです」

「なに言ってるのよ。今朝だって挨拶してるのに。じゃー、また寝なくちゃね」

と、言い終わらないうちに、ふと見ると廊下に卯門が立っていた。手には竹の皮で包んだ物を持っている。卯門は志麻がいるのに驚いたようだ。志麻も驚いた。たった二年ちよっとしか経っていないのに、卯門の様子は変わっていた。志麻は胸に疼きのようなものを感じた。

「堀田様はかなり心配されています。拙者に見てこいと……。どのように報告すべきでしょうか」

困った顔をしているが目は笑っている。こうなっては綾乃の狸寝入りは意味がない。すぐに起き上がった。

「卯門、美味しいお食事をとりたかつたら、今のことは黙っておくことです」

綾乃は、卯門と呼び付けにしている。まるで自分の息子のようだ。

「ははー、何事も奥方様の仰せの通りにいたします」

四人は笑った。志麻は卯門から目を離せなかった。笑い顔を見るのは初めてである。口を大きく開け、大きな声で笑う。しかも、この人は冗談も言える。

「卯門、何を持ってきたのですか。お見舞いということは私のものですね。さっ、下さいな」

卯門は、言われるままに手渡した。お萩だった。志麻は萩が来ていることを忘れていた。

「喜和、お皿を二つ持ってきたな」

「奥様、二つですか……」

「いいから持ってきたな」

首を傾げながら喜和がお皿を持ってきた。綾乃は、二つずつを乗せた。まだお萩は二つ残っているが丁寧に包んだ。

「さ、私と喜和は此处で食べます。あなたたちはお部屋で食べなさい」

志麻と卯門は顔を見合わせた。志麻は何となく恥ずかしいと思った。この前は何も感じなかったのに。

二人は部屋の真ん中にお萩を置いて座った。面と向かうと志麻は卯門の顔をまともに見るのが出来なかった。どうしたのだろう。どうにも気恥ずかしさを感じる。お客の前では何も感じないのに。卯門は、そんな志麻を笑顔で浮かべて見ていた。

「志麻殿はお萩が嫌いなのでしょうか」

「い、いえ。好きですが」

「拙者も好きでして、見舞いを口実にしました。奥様は必ずお裾分けしてくれますので」

「まあ、お萩にしたのはご自分のためだったのですか」

卯門は、また大きな声で笑った。

「どうぞ、志麻殿から」

そのように畏まって言われるとかえって手を出しにくい。もじもじしていると卯門が、では、お先にと手を出した。大きなお萩であったが一口で頬張った。口をもぐもぐ動かしながら、旨い旨いと言っている。何とも大らかな男だ。しきりに、どうぞどうぞとお萩の方に手を持っていく。しかし、どうしようもなかった。一挙手一動を見られていると思うと、果たして右手で、いえ左手……などと詰まらないうことで考え込んでしまう。

喜和がお茶を運んできたが、一つのお萩を前に、もじもじしている志麻を見て、そつと部屋から離れていった。

「志麻殿、お萩は奥様の所に、まだ二つ残っています。一つはお父上のものでしよう。もう一つある。後でそれを頂いてください」

卯門は、さつと手を出し、お萩を頬張ってしまった。志麻は呆れるばかりである。卯門は食べ終わると、では、拙者は仕事に戻りますと言い残し、部屋を出て行ってしまった。空のお皿を前に志麻は座っていたが、妙に心地良い気持ちになっていた。

桃若が辞めた後、千代が紗代の姉さんになった。たまたま、紗代と志麻にお座敷が掛からない日があった。

「千代姉さん、もうすぐ年季明けですね。明けたらどうするのですか」

志麻と紗代が訊いた。

「いづれ二人も経験するのね。ふふ、私はね、年季奉公を始めた時から自前になるって決めてたの。私には弟がいたんだけど、三つの時に流行り病で死んじゃって、今は母と二人きり。父親は誰だか知らないの。食べていくのは大変だったわ。母は子供がいるから住み込みは無理。通いで雇ってくれる店なんてないでしょ。母は日雇いで何でも遣ったわ。私も子守なんかをやった。でも、食べていけないの。ぎりぎりの生活。そしたらね、ある店のご主人が芸者でも遣ったどうだつて教えてくれたの。私が十四歳の時だったわ。母は反対したけど私はその気になったの。だって、母にはお金が入るし、私は屋形で生活できるでしょう。運が良かったと思う。もし吉原だったら女郎さん」

気風の良さが売り物の千代。いつもなら、しゃきしゃき話すがこの日は違った。自分に語っているように静かに話した。

「いい旦那さんにも巡り会えたし……。一緒にはなれないけど優しくしてくれるの。水揚げの時に訊かれたの。年季が明けたらどうするかって。私、自前になって母を呼びたいって言ったの。所帯染みた話をしちやいけないってことは知ってたわ。でも私の夢だから話したわ」

「旦那さんは何と……」

「判った、つて一言だけ。私は心配だった。どのように判ったのか、私には判らない。ザーっと心配だった。ザーっと……」

こう言うと千代は急に泣き出した。二人はどうして良いのか判らなかつた。千代が続けた。

「この前…… そろそろ年季が明けますつて、旦那さんに言ったの」

千代は、また言葉を切り、泣き出した。

「そうしたらね…… そうしたら、判った。家を用意しようつて。そしてね、二人で住みなさいつて……」

千代の泣き声は号泣に近かつた。

「母のことを旦那さんに話したのは一度きり。それを覚えていてくれたの。私、嬉しくて、嬉しくて……。それに自前は大変だろう。充分な手当てを出せれば良いけど、私も仕事仲間に頼んでみるつて」

貰い泣き。二人にとって初めてのことであった。

話し終わった千代は、いつもの千代に戻っていた。いや違う。肩の力が抜けたのか、柔らかな感じの千代になっていた。

二人は部屋に戻ったが落ち着かなかつた。時刻は八ツ頃、まだ日が暮れるには

早い。紗代は、志麻に外を歩いてみないかと誘った。静に伝え、二人は表に出た。

深川界限は賑やかな雰囲気だった。棒手振りが空っぽになった箆を肩に走っていく。蕎麦屋は、二八蕎麦だよー喰わないかーと客を呼んでいる。うるさいのは瓦版売り。大した事件でもないであろうに大声であーだこーだ言いながら人を集めている。継ぎ接ぎだらけの格好で夕餉の材料だろうか、竹の皮で包んだ物を大事そうに抱えて歩くのは、何処かの裏長屋のおかみさん。同じように継ぎ接ぎの着物によれよれの袴で腕を組み、俯き加減に歩くのは浪人であろう。顔を見るのも辛い。子供たちは泥だらけになり遊んでいる。

二人は黙って歩いていった。其処此処に人生があつた。千代の話には自分たちが知らない人生があつた。志麻が言った。

「ねえ、花見橋に行ってみない」

二人は走った。

大川は秋の風情。川べりには薄が茂り、ふさふさと真つ白な穂が揺れていた。大きくゆつたりと流れる川。二人はただ眺めていた。二人は同じことを考えていた。――私にはどのような人生が待っているのだろうか。

「あらっ」

後ろから声を掛けられた。二人が振り向くと黒紋付姿の女がいた。紗代も志麻も顔を見合わせた。互いに首を振った。会ったことがない芸者だ。

「ほほほ、そんな頓狂な顔をしないでおくれよ。覚えちゃいまいだらうね。無理はないよ。見世出しの時だったからねえ。あたしは歌舞練場の隅っこに座っていたし」
あの時は、廻りを見る余裕などなかった。

「あたしは小吉。宜しくね」

二人も頭を下げた。小吉…… 名前を聞いたことがある。自前の芸者で売れっ
妓のはずだ。

「いいわねえ、二人で川なんぞ見ちゃって。ゆく川の流れは絶えずして…… 方丈
記の雰囲気ね。書いた人は、鴨長明だったカモ。なんてね」

洒落ているらしいが二人は鴨など知らない。この人、何を言ってるのだらうと、
はつきりしない顔付きでいる。

「ほほほ、まだ無理だったようね。何してるの」

また二人は顔を見合わせた。歳上から話すべきだが……。ふと順番を考えた。

多分、私のはず。紗代が口を開いた。

「川を見てたんです」

小吉が笑い出した。

「そうね、何処から見てもその通りに見えるわ。ま、いいか。ねえ、橋の上で会うなんて、何か縁を感じない。今度、あたしんちに遊びにおいでよ。磯部の近くだから直ぐ判る。えーと、梅若さんがあんたで、千鳥さんは、あんたね。あたしは琴音姐さんとも親しいんだよ。いろいろ話は聞いている。間違えちゃいけないよ。琴音姐さんよりも、あたしの方が若いんだからね。ま、そんな事はいいか。いいね、時間が出来たらおいで」

人で喋り、納得顔のまま小吉は軽やかに尻を振りながら行ってしまった。二人は何故だか笑ってしまった。

(八)

三吉は一通りの料理をこなせるようになっていた。喜助は仕上げの味付けや盛り姿に手を加えるだけで済んだ。

味付けは自分の舌で覚えなければ本物は作れない。同じ魚を使った煮付けでも、その日の天候などで醤油、塩などの加減を変えなければならぬ。隠し味の生姜などは生ものだ。いつも同じ味とは限らない。材料、一つ一つの味をみた上で料理する。三吉は、そこいら辺もあと一步のところまで来ていた。

だが、三吉は、あれ程好きだった包丁が使えなくなっていた。

やぐざに絡まれている老人を助けた時に、指の筋を切られてしまったのだ。今は完治し、何とか包丁も使えるようになってはいたが、近頃塞ぎこむことが多い。

「三吉、どうだ、包丁の方は」

「親方、あつしは兼松の料理を作れないんじゃないかと……」

喜助も口には出さないでいたが、同じように考えていた。包丁が不自由とは料理人に致命的とも言えることだ。

「親方、願いがあるんですが……」

「言ってみろ」

「へえ、閑を頂きたいと……」

「なにつ、閑だと！ まだ何年も経ってねえじゃねえか。包丁を捨てるって言うつ

もりか」

「逃げ出すつもりはありません。だが、この指で無理しても、所詮、無理は無理。このままじゃ、迷惑を掛けるだけ」

三吉は、ガバツと手を付き頭を下げた。

「やり直してえんで。仕出屋は無理。だが食い物を商いてえという気持ちは前よりも強くなっております」

「じゃー、何をやりてえっていうんだ」

「蕎麦屋……」

「蕎麦か……。三吉、おまえ出汁には自信あつたな」

「へえ。蕎麦を打ち、蕎麦を切る。この指でも遣れます。親方、お閑を」

喜助は腕組みをして考えた。三吉は畳に手を付けたままだ。どの位、二人は同じ姿勢でいたのだろうか。喜助が口を開いた。

「閑は出せねえな」

「えっ。しかし、このままでは……」

「そうよ、このままではいけねえ。三吉、礼を言うぜ」

「親方、どうなさったんで……。何を言いたいのか……」

「三吉、蕎麦を遣れ。この兼松で」

「兼松で蕎麦を……」

「おう、そうよ。客は、おまえの蕎麦と俺の天麩羅を喰う。決めた。三吉、道具を揃えろ。蕎麦の仕入先も捜せ。焦るこたあねえ。じっくり遣れ。いいな」

「へえ、お、親方……」

三吉は人が変わったように明るくなった。喜助にも心を開くようになっていた。親の甚平も驚いたほどだ。聞けば何てことはない、自分は三男坊。邪魔者だと勝手に思い込み、僻んでいたらしい。

活き活きと準備を進める三吉だが、蕎麦は難しい。兼松は仕出屋として名前が通っている。喜助は別に屋台の蕎麦をどうこう言うつもりはないが、三吉には生半可な蕎麦であれば扱わないと釘を刺していた。

喜助も力を入れている。それには理由があつた。三吉の蕎麦の出来次第で兼松を料理屋にしようと思っていた。料理も飯も蕎麦も喰える店だ。勿論、仕出屋も続ける。仕出し料理は、今まで通り高級なもの。店は一膳飯屋のような気楽さで料亭並みの料理が喰えるようにしたかった。だが蕎麦については考えが違った。十六文より高くても構わない。洒落た蕎麦にしたかった。三吉は、あつしに出来ませるかね

え、などと弱腰なことを言うが目には自信が溢れていた。

(九)

卯門は、辟易としていた。

町人たちは定町廻り同心の道筋を知っている。さらに廻る自身番の順番や時刻までも知っている。訴え事などがあると自身番か道筋で待つことになる。藤次郎と共に廻る時には道筋で待つ者は少なく、ほとんどが自身番で待っている。従って、自身番で訴訟を受けることになるが、この場合は予め月行事や岡っ引き、下っ引きが内容を聞いていたため判断がしやすい。それに、それほど多くの訴えはない。だが卯門が一人で廻る時には違った。町人たちが道筋で待っているのだ。隣がうるさい、女房が浮気をしているらしい、相棒が金を返さない、亭主の酒を止めさせてくれ……。旦那、どこかに仕事はねえでしょうか。旦那、一人じゃ寂しくて、何処かに良い人いないかねえ。

これも定廻りの仕事なのだろうか。別に刀を抜くような捕り物を望んでいる訳ではないが、左腰の両刀を重く感じてしまう。剣道には人一倍力を入れた。お陰で心身を鍛えることができた。流派は、空心一刀流。刀など使う機会がない方が良いのだが、無性に剣道を遣りたくなることがある。

ある日、小粋な中年増が道筋に立っていた。卯門をみると血相を変えて駆け寄ってきた。しっかと話を聞かねばと卯門は身構えた。

「旦那、あたしの大事な染五郎が居なくなっちゃったんです。何とかしてくださいよ」

「染五郎の歳は幾つだ」

「まだ二つなんですよ。早く探し出さないと大変なことになります。旦那、探してくださいな」

「どんな格好をしていたのだ。着物の色は」

「……」

「早く申せ」

「旦那、なに言ってるんですか。あたしの猫ですよ」

滅多に酒を呑まない卯門ではあったが、この夜は違った。へべれけになって戻

つてきた。玄關で卯門を迎えた喜和は大声で言った。

「まあ、だらしがない。志麻お嬢様に言い付けますよ」

卯門は翌朝、この言葉を思い出したが、何やら嬉しい気持ちになつてしまった。何でも志麻に告げ口して欲しいと思つたが、頭が割れるように痛い。二日酔いだ。

藤次郎は卯門にはお構いなしに朝餉をとると、お先にと出て行つた。この日は朝出勤だという。それにしても早い出た。卯門は思い出した。付き合つたことがあるが朝風呂である。湯屋に寄つてから奉行所に行くのだ。すつきりとした湯上り姿で町を廻れば、粋な同心と町人の目を集める。

自分にはまだ時間がある。卯門は部屋でごろ寝をしていた。

喜和が、どたとどたと部屋に飛び込んできた。またお説教であろうか。

「卯門様、伊吉さんです。急いでください」

こんなに早く伊吉が。卯門は寝巻のまま玄關に顔を出した。

「旦那、大旦那は」

伊吉は二人を区別するために藤次郎を大旦那と呼ぶ。藤次郎は、みつともないから止めると言うが伊吉は気にも留めていない。

「朝出勤だ。どうした」

「へえ、殺しです。米問屋の杉造。金も盗られていやす」

卯門は、一気に眠気が醒めた。伊吉に待つてると言い、部屋に戻り身支度をした。

米問屋俵屋の周りには大勢の野次馬が居た。伊吉の下つ引きたちが二人を迎えた。卯門は下つ引きに奉行所には知らせたのか訊いた。一人が走つたと聞き店に入った。杉造は胸を刺されていた。凶器は残つていないようだ。杉造の側には蓋が開いたままの手金庫がある。番頭がおどおどした様子で話した。

昨夜、杉造は店の者に早く寝るように言つた。いつもであれば小僧が店先の潜り戸の側で寝るが今夜はいいと言つたらしい。番頭は夜中に客が来るのだろうと思つた。以前にもこのような事があつたからだ。だが、客が誰であるかなどは全く判らないと言う。

そこに藤次郎が駆けつけた。藤次郎は卯門と伊吉から状況を聞いた後、部屋を調べた。次いで廊下や屋敷全体を、そして表に出て塀を一廻りした。

藤次郎は黙つたまま調べている。卯門は藤次郎の傍に付いて廻つた。考えてみれば卯門にとつて初めての事件である。ふと、同心見習いで良かったなどと弱気な考えも出てしまう。伊吉と俵屋に来たのは良いが、どのよに差配すれば良いか判ら

なかつたからだ。藤次郎は、一通り調べ終わった。

これは縁故か顔見知りの仕業。痴情の縄れか金目当てであろう。杉造の身边を洗えば犯人は挙がる。それほど込み入った事件ではないだろう。ふと卯門を見た。緊張し捲った顔をしている。そうであろう。初めての事件だ。卯門に任せてみようかとも思ったが、人が死んでいる。盗みだけであれば任せても良いのだが……。

「卯門、後で調書をまとめるが、番頭や使用人たちから聞いた話を忘れるなよ。まず卯門に書いてもらうが、伊吉、お前も一緒に頼むぞ」

二人は頷いた。藤次郎は杉造の体を再度調べたかった。下つ引きと月行事に死体を自身番に運ぶように言った。

(十)

千代の年季が明ける。千代は、もう一年お礼奉公をと静に言ったが、静は断つた。

「千代、あんたは自前になってお母さんと暮らすのが夢だったんだろう。一年先に延ばすなんて、あたしや嫌だね。これからも頑張るんだよ。何かあったらいつでも絹弥においで」

千代の母親も来て荷物を運んだ。屋形の皆も手伝った。千代の目には始終涙があつた。

「女将さん、それにみんな。今までお世話になりました。これからも宜しくお願いいたします」

玄關を出る千代の背中に静が切り火をした。清々しい門出であつた。

千代と桃若が居なくなり、絹弥にいる芸者は一人になってしまった。半玉は紗代と志麻が加わり六人。静は、半玉の二人を芸者にすることにした。紗代と志麻はどう考えても早すぎる。

紗代と志麻は売れっ妓になっていた。最賃も出来た。紗代の三味線、志麻の舞も一応のところまでいつていた。立方と地方を交代でやる。

「二人を寄越しておくれ」

茶屋から声が掛かる。静は座敷の遣り繰りに忙しかった。日取りが重なることもある。

「女将さん、この日は無理だよ」

「何とかしておくれよ。四半時でもいいから。お客に顔が立たないよ」

一見さんであれば断ることも出来るが、最良の紹介であれば無下に断る訳にもいかない。組にしたのは自分。一人一人を廻せば良いのだが、そんなことは出来ない。静は嬉しい悲鳴をあげていた。

いくら売れっ娘になったとは言え、忙しいのは夕暮れ時から。それまでの時間、

二人は稽古に明け暮れていた。だが気になることがある。

「ねえ、鴨って何かしら」

「梅若さんも気になっていたの。私も」

「あら、千鳥さんは武家の出でございませわよね。それ位のご存知なのでは」
「まあ、憎たらしいお言葉。そうですとも武家の出でございませよ。ヤットウであれば幼少の頃、嗜んでおりますわ。一度、お手合わせしたいもの。でもねえ、鴨なんて知らないわ」

二人は小吉のところに行ってみたいと思つたが、まず琴音に会うことにした。

琴音は相変わらず汗を流して弟子たちに教えていた。以前にも増して稽古は厳しくなっているようだ。琴音は二人を見て、にこつと笑つた。

「待つてなよ。もう少し終えるからね」

その言葉に弟子たちが振り返つた。あつ、と声を上げる者もいた。中には置屋から稽古に來ている仕込みさんもいる。二人のことを知っているのだろうか、目を輝かせて見ている。琴音は機に敏な女。

「仕方ないねえ。判つたよ。二人で何か遣つておくれよ」

思わぬ展開に二人は驚いたが、キラキラ輝く眼差しを受ければ、断ることなど出来ない。紗代の太鼓に志麻の三味線。

「さつ、ちよいと早いけど、今日の稽古はお仕舞い」

弟子たちは心残りの表情で帰つていった。

「突然、済みません。お稽古の邪魔をしたようで……」

「よそよそしい事を言うんじゃないよ。久し振りだね。まあまあ、お姐さんほくなくちゃつて。さつきも良かったよ。やはり、場を踏むと違ふねえ。忙しいんだろう」

「お陰様で。楽しく遣らせていただいています」

「ところで二人揃つてどうしたんだい。恋の悩みじゃないね。だったら一人で来るからね」

「琴音さんたら……」

とは言ったものの、まだそのような思いを抱いたこともない。それはそれで物足りない感じもする。志麻は、ふと卯門の顔が頭を過ぎった。

「幾つになるんだい」

二人が同時に言った。

「もう直ぐ十五です」

どうやら生まれ月は近いらしい。

「十五ねえ。これからだ。いいねえ。ところで何か話があるんだろう」

二人は、小吉に会ったことを話した。ちよつと恥ずかしかつたが鴨についても話した。琴音は笑顔で聞いていた。

「花見橋で会ったのかい。橋って言うのは二つを結びつけるもんだ。鴨だね。そろそろ鴨なんかも勉強しなければね。あたしは余り鴨は好きじゃない」

琴音はしきりと鴨、鴨と言いながら一人で話し一人で頷いている。

「琴音姐さん、鴨って何ですか」

「ふふ、鴨長明、鎌倉時代の人でお坊さん。方丈記って名の本を書いたのよ。ねえ、清少納言って聞いたことがある」

二人は頷いた。名前だけは聞いたことがある。

「じゃー、吉田兼好は」

首を横に振った。

「清少納言は枕草子、吉田兼好は徒然草。枕草子は、春は、あけぼの。徒然草は、つれづれなるままに、日ぐらし硯に向かいて……」

「何ですか、それ」

「本の書き出し。あたしが知っているのは此処まで。ちゃんと知ってる訳じゃないのよ。この人たちが書いたものは随想っていうらしいの。日頃思ったことを書いた本。そうね日記に毛が生えたようなものよ」

「……」

「清少納言が女だつてことは知ってるわよね」

二人は頷いた。

「芸者がお相手するお客さんには、いろいろな人がいるわよね。お侍様も商人もいればお坊さんだっている。それにお客さんたちはいろいろな趣味を持っている。好きなことを話し出すと止まらなくなる。あたしたちは、そんな話に入らなくてもいいし、入れっこない。ま、ある意味ではお客様の自慢話。でもね、どんな話を話しているのか位は判らないと、お客様も醒めちゃうわ」

納得できる話だ。二人は身が引き締まる思いがした。

「鴨には俳句、川柳、和歌、狂歌、根付け、釣、朝顔……切りがないほどある」「どうやって……」

「お座敷でお相手する時だけど、お客様の話を良く聞いて、一つ一つ覚えていくのね。ふふ、これも大事なこと。さつ、小吉にも宜しく言つといておくれよ」

「小吉さんにですか……」

「あんたたち、今から行くんだろう」

二人は琴音に礼を言つて表に出た。鴨、鴨と頭が痛くなつていたが、思い切つて小吉を訪ねることにした。小吉の家は難なく見つかった。だが余り時間がない。どうしよう。とにかく顔だけは出しておこう。小吉は良く来てくれたねえと二人を部屋に通した。今日、小吉は座敷がないという。

「今、婆さんは買い物に行つてるからね。お茶でも入れようか」

小吉は台所に行った。二人は、部屋を見廻した。棚がある。棚には何冊もの本が綺麗に置いてあつた。

「あれは鴨ね。でも随分あるわね」

小吉が来た。

「鴨とか言つてたけど、何のこと」

搔い摘んで話したが、小吉は、あんたたち覚えていたのねと笑い出した。そしてひよいと腰を上げ、棚から何冊かの本を持つてきた。

「あたしは知識とか教養とか、そういうのつて大嫌い。ただ、読むのが好きだから本を揃えただけ。でもね、琴音姐さんが言ったことは大切なことなんだよ。お客さんが何を話しているか全く判らないようじゃ、場の雰囲気盛りが上らないからね」「本て高価なんですよ」

「そうね、一冊一冊前後かしたら。買うことはないのよ。貸本屋もあるし……いいわよ、読みたい本があれば貸すわよ」

急に貸すと言われても何が何だか判らない。

「仮名草子、浮世草子、読本、教本……。軍記も国学もあるわ。あたしはお金が入ると着物を買わないで本を買っちゃうの。変な芸者つて言われてるけど、お陰で、最頁さんも多いのよ」

小吉の芸は、深川でも指折りと聞いている。最頁客が多い理由は芸だけではなかつた。二人は芸者の面白さと同時に難しさを感じた。

「あんたたち、お座敷でしょ。遅れたりしたら駄目よ。あたしも楽しかった。また

おいだ」

(十一)

卯門は伊吉と共に状況をまとめた。

杉造は四十半ばで働き盛り。傷痕は胸と背中にあつたが、胸の方が背中への刺し痕よりも幅が広い。前から刺され、部屋のほぼ中央で倒れた。着物は余り乱れていない。人を待つていたらしいと番頭は話したが、裏の通用口は中から鍵が掛かっていた。部屋の前の庭は、掃き清められたまま。手金庫の蓋は開いていたが、杉造の横にきちんと置いてあり中は空だった。使用人たちは大声や悲鳴を聞いていない。女中が倒れている杉造を見つけたのは七ツ半頃。杉造の身内は息子一人。妻とは五年ほど前に死別している。元気な女だったが急に胸が痛いといわれ、医者 came 時は死んでいたらしい。医者は心の臓が発作を起こしたのだらうと言った。息子は、他の米問屋で商人の見習い中。住み込みで実家に戻るのには藪入りの時だけ。

藤次郎は、調書を読んだ。

「卯門、これらの内容から何が判る」

藤次郎は卯門を試すつもりはない。伊吉と共に手掛かりを捜す積りだ。

「順序立てて推察はできませんが……。まず使用人たちが大声や悲鳴を聞いていないのは、杉造の居間と使用人たちの部屋が離れていたためとも言えます。が、大声を出せなかつたとも考えられます。また、犯人は凶器である刀かドスの扱いに慣れている。つまり腕に覚えがある者と考えた方が良いと思います。しかも男」

「何故、腕に覚えある男と言えるのだ」

「胸の刺し口です。刀もドスも身幅は、ほぼ同じ。刺し痕の幅は身幅に一致します。扱い慣れていないものであれば、胸から背中まで刺し通すのは難しいし、女では無理。仮に突き通せたとしても、手が上下に動くもの。刺し痕は身幅よりも広くなります」

「侍だと思ふか」

「いえ、やくざ者と思います」

「何故だ」

「はい、侍であれば刀を遣うはず。部屋の中で胸を刀で突く。腕が良ければ刀は体

を突き通します。であれば背中への痕は身幅と同じになります。使ったのはドス。つまりやくざ者」

「侍が脇差を使ったとは考えんのか」

「堀田様、刀が脇に置いてあるんですよ。わざわざ脇差を使う理由がないでしょう。それに刀の場合、突きではなく斬るはずですよ」

「判った。伊吉はどのように思う」

「へえ、旦那の見立て通りと……。一瞬のうちに刺されれば声は出せません」

「着物は乱れていなかったが」

「はい、腕の立つものであれば、杉造が気付く前に一気に……」

「それはおかしいではないか。であれば杉造は部屋の中央ではなく床の間の近くに倒れていたはず。座布団は床の間の前にあった。つまり杉造は立っていた。いや座っていた処から何らかの理由で立ち上がり動いた」

卯門が口を挟んだ。

「しかし、犯人との揉み合いはなかった」

「如何にも」

「大旦那、何故、杉造は立ち上がったんで」

「判らん。いまし考えられた方が良いな。手金庫をどう思う」

「私は金が目当ての犯行と思います。犯人は金をせびりに来たが、この段階では額は決まっていなかった。決まっていれば手金庫など横に持つてくる必要はないはず。杉造は手金庫を傍に置いて蓋を開けた。金子を出したが犯人は、もつと寄せと云った」

「成る程。そこで取っ組み合い……。いや、そうはならなかった。もつと出せとドスをちらつかせたが杉造は断った。犯人はドスを持つて杉造の胸倉へ……。これも違うな。杉造は部屋の真ん中で倒れていた。何とも妙だ」

三人は腕組みをして考えたが、どうにも辻褄が合わない。

「堀田様、もう一人その場にいたと考えたらどうなります」

「も、もう一人だと。仲間がもう一人いたと言うのか」

卯門が、ゆつくりと話し出した。

「仲間かどうかは判りませんが、ともかく、二人は杉造の前に座った。一人が金をせびる。杉造は断る。犯人は、それならばと、もう一人にドス突きつける。止めると杉造が立ち上がり犯人に近付く。焦った犯人が突き刺した」

「うーん、杉造にとり人質のような者か。在り得ないことはないが、卯門、では刺

した後二人で逃げたと言うのか」

「……ドスを突きつけて一緒に来いと脅す」

「さて、筋が通らん。犯人は、杉造を殺す積りはなかったが刺してしまった。金は手に入れた。そうなれば、もう一人は逃げるのに邪魔ではないか。卯門、拙者は脅かしてまで一緒に逃げるとは思えんな」

また沈黙が続いた。伊吉がぼそつと言った。

「狂言……」

藤次郎と卯門が、ぱつと顔を上げた。藤次郎が言った。

「杉造の弱みを握っている者、または杉造が心を掛けている者と犯人が仕組んだ犯行……。よし、この線で調べを進める。いずれにしても、もう一人は杉造と顔見知りの者」

「大旦那、あつしらは米問屋を廻つて見やす。それに弱みと言えば遊び。遊びと言やあ、博打に女。賭場に遊廓。そこいら辺を探ろうと思いやす」

「おう、頼んだぞ」

「堀田様、拙者は……」

「な、何、己は何をすれば良いかと聞くのか。この戯けが。伊吉と手分けして探れ」

その頃、兼松では三吉が道具を揃え蕎麦打ちを試していた。

出し汁は問題ない。鰹節や鯖節、煮干、昆布などをいろいろと組み合わせ兼松独特の味が出来上がっている。汁は三種類で笹蕎麦と掛蕎麦や蕎麦掻きごとに異なる汁を作った。味酢の分量について喜助と三吉の考えが異なったが、三吉は少し甘めの汁にしたいと言った。女客を考えることだった。

三吉は蕎麦打ちに悩んでいた。蕎麦屋や屋台蕎麦の亭主から打ち方は教えてもらっている。蕎麦粉と繋ぎの粉の割合なども聞いた。粉塗れになって練習をした。こね鉢やのし棒の扱い、こま板をずらす要領、包丁の入れ方など身に付けるのは早かった。だが茹で上げた蕎麦は、ただの蕎麦。こね方、蕎麦粉と繋ぎの分量を変えたりして何回も試したが、全く面白くなかった。これでは兼松に出せない。喜助が揚げた天麩羅と食べてみたが、蕎麦は天麩羅に負けている。両方が引き立たなくては意味がない。このままでは他の蕎麦屋と同じである。三吉は考えあぐねていた。

「親方、相談があるんですが」

「おう、三吉、順調か」

「いえ、全く……。蕎麦が面白くないんで」

「面白くない。どういふことだ」

三吉は説明した。

「で、どうする」

「へえ、半年ほどお閑を頂きたいんで」

「また閑か。何かと言うとおまえは閑をくれと言う。閑をとって滝にでも打たれようってのか。そんな事は止めておけ」

「親方、冗談はやめてください。信州に行こうと思つてます」

「信州……」

「へえ」

「三吉、信州に蕎麦屋などないぞ。どの家でも自分で蕎麦を打つて喰つている。蕎麦粉も臼を使い自分で作る。総て自前だ。行つてどうする」

「もともと蕎麦とは、そういうもの。あそこでは、家ごとに自分の蕎麦を作つていゝるはずですよ。それらを知りたい」

「その上で、手前の蕎麦を打つて訳か」

「へえ」

「……」

「どうでしょう」

三吉は、翌々日に旅立つた。

(十二)

八幡様の祭りが近付いた。

絹弥でも三人の芸者が手古舞の衣装を着け、嬉々としていた。

「今日から三日間、わたしたち三人は男。いいわね」

屋形の皆もうきうきしている。静は紗代と志麻に、どうするか聞いた。手古舞に憧れてこの世界に入つてきたのだ。半玉でも踊ることは出来る。だが、二人は私たちはまだ、と遠慮した。静もそれ以上は言わなかつた。

祭りの最中はお座敷も少ない。ある町では鎮守の境内で、またある町では広小路に筵を敷いたり縁台を持ち込んで宴を開く。紗代と志麻は町娘の姿で町内を歩き、遊んだ。二人は、既に深川界限では名が通つている。其処此処から声が掛かるのが楽しい。

二人は、花見橋に行つた。橋の欄干には提灯が掲げられている。

「三年後には手古舞を踊りましょう」

欄干にもたれながら二人は話した。

橋を渡る者たちの顔も明るい。既に酒が入っているのだろうか、赤い顔をした商人風の男たちもいる。普段であれば少し離れて歩く若い二人連れも、この日ばかりは寄り添って歩く。

そんな二人連れを見ると、志麻はどういう訳か卯門を思い出してしまふ。この世界に入らなければ、今ごろあのように寄り添って歩いていたのかも知れない。

紗代は、桃若の言葉を思い出していた。男には気をつけなよ。

——桃若姉さんは、今、どうしているのだろう。

あのような形で盃を返すことになつたが、やはり姉さんであることには変わらない。

卯門たちは祭りどころではなかつた。米問屋の株仲間に関き込みをしたが、杉造は義理堅く真面目な商人、博打などに手を染めたこともないはずだと口を揃えて言う。商人としての評判も良い。道楽もせず酒も呑まない。どうやら、付き合つても面白い男ではなかつたようだ。番頭が持つてきた帳簿を調べたが、俵屋は儲かつていた。今は、息子が継いでいる。息子にも聞いたが、私は物心付いた頃から見習いに出され、父親のことは良く判らないと言つた。手掛かりがない。賭博をやるような男ではないと聞いたが、念を入れたかつた。

府内にはやくざの親分が三人いた。今は縄張りも落ち着き、問題は起こしてない。彼らは賭場を開いたり、香具師として祭りや縁日での露店を差配している。岡場所を持つやくざもいる。幕府が認める遊廓は吉原だけだが、吉原は金が掛かるし江戸は男の方が多い。そうそう厳しく取り締まる訳にもいかない。

やくざは二足の草鞋を履く。町内のいざこざ、商人同士のちよつとした諍いざかいなどは頻繁に起きる。当事者が公にしたくないこともある。そのような場合、自身番に訴えずにやくざに頼むことが多い。やくざにとつてはお客様である。片方に肩入れすれば、今後、話が来なくなる。従つて、結構公平な仲裁をする。また、奉行所にとつても裏の社会に詳しいのはやくざであり、捜査に協力を求めたりすることがある。余程阿漕なことを遣らない限り、やくざを取り締まつたりはしない。伊吉は三人の親分とも通じ合う関係にある。

藤次郎は伊吉の聞き込みに期待していたが、杉造に関する情報は得られなかった。それに、金廻りが良くなったチンピラも見当たらないとのことだ。

「大旦那、杉造は堅物の見本みてえな男ですぜ」

卯門にとっては得ることが多かった。伊吉の仲立ちで三人の親分と顔が繋がったのだ。連中は同心など怖くも痒くもないと思っている。自分たちを蔑むような者であれば同心であろうが与力であろうが喰って掛かる。たとえ新米であっても、まともに接する相手には、多少だが心を開く。聞き込みに行ったのは卯門たちだが、逆に卯門は何やかやと聞かれてしまった。

「卯門さん、女房は……。えつ、まだ居ないのかい。じゃー、好きな女ぐらいは居るだろうに。えつ、そつちも居ない。情ねえな。どうだい、いい女を紹介するぜ」
「腕は良いのかい。いくらヤットウを遣ったからつて、喧嘩剣法には通じねえこともありませ。今度、教えてやりますよ」

「世の中は相見互いだ。」法度一辺倒、お触れ大事だけじゃー、遣っていけねえよ」
伊吉は遣り取りを聞き、連中は卯門を気に入ったなと思った。

「残るは女か。杉造は四十半ば。吉原にも岡場所にも顔を出していないし妾も囲っていない。いくら堅物といってもなあ。卯門、おぬしならどうする」

「はつ、女となりますと、拙者……。まあ、何と申せば良いのか……。不慣れなもので……」

「何を言っているのだ。おぬしが慣れていようが居まいが、そんなことはどうでも良い。どのように探るつもりかと聞いておる」

「はは、置屋、茶屋、料亭でも……」

「それで良い。杉造は、女房を亡くし独り身同然。茶屋では酒を呑めなくとも遊べる」

静は、杉造が殺された話を聞き、悩んでいた。桃若は絡んでいるのだろうか。この社会では何があるうが、客について話すことはできない。仲間内でも旦那の名前や屋号すら口にしない。だが杉造は殺された。桃若はこの屋形で暮らした云わば娘のようなもの。絡んでいなければ良いが……。いずれ岡つ引きか下つ引きが聞き込みに来るかも知れない……。やはり、何も話さない方が良いだろう。

紗代と志麻は時間を見つけては、小吉の家に遊びに行った。

小吉はいろいろな話をしてくれた。自前で遣つていくには大変らしい。生半かな芸では声が掛からない。何か一つでも良い、他の芸者が持つていないような芸。それに何と言つても必要なのは客への気配りと場を盛り上げる物言ひ。だが、でしやばつてはいけなしいし、遠慮していてもいけない。場をほど良く取り持つ機に敏感性。酒のご相伴も欠かせないが、自分が酔つてしまうようでは駄目。軽いほろ酔い加減で居ることが大切。そのためには毎日の生活に気を配り、健康でなくてはならない。

まだある。茶屋への挨拶廻りを欠かしてはいけない。そして何よりも大切なのは旦那の後押し。小吉は、旦那が離れていくようでは、芸者として失格とも言つた。

「でもね、旦那を金蔓と思つた途端に、芸者の芸は落ちていくんだよ。怖いものだよ、人間てえのは。芸者は、惚れ合つた人を旦那にするけどね、互いに尽くす気持ちなくなると秋風が吹き出すんだよ。だからと言つて必死になつて縄なわり付いてもいけない。それじゃー、夫婦と同じになつちやうからね」

志麻が聞いた。

「芸者は夫婦になれないんですか」

「そんなことはないよ。きちんと結婚した芸者も大勢いるよ。茶屋遊び、芸者遊びは金に余裕がある男がすること。大店とかそこそこの店の主人が多いんだよ。これは、あんたたちも判るよね。つまり奥さんがいる。たまたま奥さんが死んだりすると後釜に入れたりする。お武家さんも良く遊ぶけど、侍とは夫婦にはなれないからね。もつとも芸者を辞めるのであれば話は別だよ。でも、侍は家と家だからねえ。死ぬほど惚れ合つちやつて、男の方が根性入れて親を説得できりゃー、一緒なれるかも知れないけど……」

小吉は、何やら言いあぐねているような雰囲気になった。お茶でも入れ替えようかと席を立とうとしたが、紗代が、いえ私ごと台所に行つた。

志麻は、漫然と後五年も経てば年季が明けるんだなと思つた。今は、稽古も楽しいし、何よりも芸事をお客に楽しんでもらえるのが嬉しい。だが、明けた後のことは考えていない。

紗代が茶を持つてきた。

「ねえ、あんたたちは旦那さんを持つつもりはないんだろう。家がちゃんとしてるからねえ。だつたら、言う必要ないかも知れないけど……」

「小吉姐さん、途中で話を切るなんて。そんなの止めてくださいよ。辰巳芸者が泣きますよ」

「ふふ、言うようになったね。いえね、旦那のことだけど、自前になった途端に旦那が逃げちゃうことがあるんだよ。お金が掛かるからね。そうなるよね……一人で遣っていくんだけど、これが大変なんだよ」

二人には、小吉の次の言葉が判った。

「転んじやうんだ。吉原の芸者は廓にいる時には転んだりしない。そんなことしたらお縄ものだからね。でも自前になれば同じ。さ、この話はこれで終り」

小吉は、この日もお座敷はないと言う。二人は、お金が掛かつて大変と言いながら、座敷が少ない小吉を不思議だと思った。

「あらあら、まだ若いねえ。あたしのことが気になるのかい。顔にそう書いてあるよ。あんたたちなら教えてあげても良いだろうね。店の名前はいえないけど、あたしの旦那は、版元さんなんだよ」

小吉はそう言うのと、立ち上って棚から一冊の本を持ってきた。にこにこ笑いながら、その本を二人の前に置いた。表紙には、辰巳の巷とあり、作者の名前は、大吉亭狛犬と書いてあった。

「洒落本だよ。これは、あたしが書いた本。雅号は、縁起良く大吉亭。狛犬はあたしの干支。誰もあたしが書いたなんて知っちゃあいない。知ってるのは旦那だけ。嬉しいじゃないか、結構売れてるんだよ。旦那も変わったところがあつてね、本が売れるたびに売り上げの二割分を持つてくるんだよ」

二人は目を丸くした。そろそろ絹弥に戻らなければならない。この本を借りることにした。

(十三)

藤次郎たちは、茶屋や料亭を風潰しに聞き込んだ。

米問屋が寄り合いに使った茶屋や料亭の女将は、杉造について何でも話した。だが、一人で来たことにはないと言う。藤次郎も伊吉も、仮に来たとしても連中は話さないとすることは知っている。だが、ひよんな事から手掛かりが見つかるかも知れない。とにかく廻りに廻ったが駄目であった。

「次は置屋だ。置屋の女将も口は堅い。だがな、茶屋の女将に比べれば客と接する機会は少ない。そこで、多少気が引けるが鎌を掛ける。どの妓かは良く判らんが、杉造と二人で歩いているのを見た者がいるとな。女将は、そんな妓はいない、見聞

違えだと言うに決まっている。もし、杉造の鬘貞の妓がいれば、女将の顔付きも変わるだろう。卯門は伊吉と廻れ。女将に話すのは伊吉だ。下っ引きは使うな」

「私は、伊吉に付いていくだけですか」

「そうだ。手分けした方が早く廻れるが、女将の表情を読むんだ。話は伊吉に任せた方が良い。卯門にとつては勉強だ。いいな」

「そりゃ知ってるよ。俵屋つて言えば米問屋。この界限かいわいの人間だったら誰でも知ってるよ。何だか殺されたんだつてねえ。可哀想な話だよ」

静が、絹弥の玄関に座っている。話している相手は伊吉。卯門は伊吉の斜め後ろななにいる。

「杉造さんについて何か知らないかなんて聞かれてもねえ。絹弥は置屋だよ。あんただつて岡っ引きだ。置屋に客が来ないことぐらい知ってるだろうに。あんたの旦那は堀田様だろう。娘さんの志麻さんは、此処こゝにいるんだよ」

客商売をする者は、どんな内容であれ、相手の目を見ながら話す。しかも、度胸の据わった目で。茶屋や置屋の女将ともなればこちらの方が目を逸らしたくなるほどの迫力がある。

「何であたしん所なんかに来たんだい」

と必死になり伊吉から目を逸らさないようにしている静。切れの伊吉は押すことにした。絹弥に廻つたのは八軒目だ。他の女将たちは表情一つ変えなかった。中には同心と岡っ引きが雁首揃えて、言い掛かりもいいところだよなどと喰つてか掛かる女将もいた。何とも辛い仕事である。

「杉造と芸者が歩いているところを見たとつて奴がいてね。そいつが、絹弥の妓だと思つて言うんですよ」

静の目が動いた。

「なに言つてんのかねえ。うちの妓が、すーさんと歩いていたらつて言うのかい。馬鹿馬鹿しい、勘違いだよ」

静は、慌てて口を押さえたが遅かった。すーさんが決め手になった。

「女将さん、話しちゃーくれませんかねえ。その、すーさんつて人の事を」

静は、桃若のことを話した。話すといつても杉造が旦那だったこと、数ヶ月前に芸者をやめたことくらいである。居場所を訊かれたが、桃若は、行き先も告げないなかった。

静にとつては頭の痛い毎日が続いた。桃若は絡んでいるのだろうか。考えるた

びに胸騒ぎがする。あたしの悪い予感^{予感}は当たる。もしも桃若が……。殺しと盗みだ。捕まれば罪は重い。以前は気の良い女だった。今も心の何処かには優しさが残っているはず。何処かで暗い毎日を送っているのではないか。だが、逃げおおせるものではない。伊吉と卯門が来たことを、静は屋形の者には話さないでいた。

紗代と志麻には相変わらず声が掛かっていた。茶屋は、芸者姿で寄りこしてくれとうるさい。静は、世話役に相談してみた。

「お静さん、あなたも頭が固いね。あたしたちは仕来りのために働いてんじゃないんだよ。お客のためだ。確かに半玉が一本立ちするまでには、四、五年掛かる。一通りの芸や持て成しを身に付けるには、普通これくらい時間が掛かるからだよ。それに辰巳芸者としての芸を磨くためだ。あなた、あの二人の座敷を見ることがあるのかい。近頃は、口煩い客とも遣り取りできるようになっているんだよ。この前、太鼓持の又助が言っていたけど、何やら洒落本の話をした。又助にはちんぷんかんぷん。でもね、客は喜んでいたらいいよ。粋がって川柳や狂歌を打つ客もいる。あの二人も打つたらいい。そしたら客が、こりや恐れ入りましたなんて、扇子で頭を打って喜んだってことだよ。それもご機嫌で」

静は、琴音や小吉のお陰だと思った。

「あなたは善い人だ。でもね、お静さん、頑な過ぎるってえのも考えもんだよ。舞は今一だが、地方を遣らせれば皆喰る。こういう妓がいたらあなた、どうする」

「そりゃー、地方でお座敷に……」

「そうだろう。そんなときや振袖じゃない。それに見習いから芸者になった妓もいるじゃないか。あの二人だけどね、梅若は立方、千鳥は地方でえことになる。梅若の鳴物も良いよ。千鳥の舞は派手さはないが、しつとりしていて玄人好み。まだ若いってえのに大したもんだ。今の芸者たちに引けをとらない。いや越えているよ」

静は、二人の衿替えを決めた。寄り合い世話役や茶屋の女将たちに日取りを相談したが、皆、一様に乗り気ではなかった。

「今更、何を言ってるだろうねえ、この人は。そんな時間があつたらお座敷に出しておくれ。商売第一だよ」

紗代と志麻の衿の色が、赤縮緬から白に変わった。帯はお太鼓、髻は、島田に。履物は草履か桐下駄になる。黒地の粋な江戸袴。屋形の皆が見惚れた。

紗代と志麻は、芸者になった。

静は堀田と兼松に使いを出した。使いは、両方の家に急病患者が出たと返事を持ってきた。

静が紗代と志麻の前に、緩みそうになる顔を引き締めて言った。

「さつ、どういう理由か、あんなたちの親が、同時に病気になったよ。その格好でいいから見舞いに行つといで。病気はかなり重いらしいから、のんびりしてきていいよ」

暗い気持ちが続く静にとつても、二人の門出は、久し振りに気が晴れるものであった。

(十四)

名前が判れば聞き込みも楽になる。桃若が見付かれれば、手掛かりが得られる。

藤次郎が伊吉に言った。

「蛇の道は蛇。頼むぞ。下つ引きの尻を叩け。どんな伝つてでも構わねえから使つてくれ」

卯門は、やくざの親分を廻こまった。壽屋ことぶきやの半五郎が乗ってきた。

「卯門の旦那、桃若つて言やあ、深川で知らねえ奴はいねえぜ。売れつ妓芸者だ。いや、だったと言った方がいい。詰まらねえ男に惚れちゃつてよお、芸者を辞めたつてえ話だ。絹弥の女将は男のことは知らねえだろうな。あの女将はいい女よ」

「半五郎、女将の話ではない。桃若だ」

「おっと、そうだったな。だがな、旦那も静には会つたんだろう。どう思った。いい女だろう」

「半五郎、その話はいずれにしてくれないか。頼む、桃若だ」

卯門は、このような場合、相手に小遣いでも渡さなければならぬのだろうか、ふと思つた。

「礼はする」

その言葉を聞いた半五郎が、急に立ち上がった。

「馬鹿言うんじやねえよ、この若造が。十手を持つているからつて生なことを言いやがつて。礼だと。舐めやがつて」

卯門は真つ青になった。どうして良いか判らない。半五郎は、ちやきちやきの江戸っ子。ぞんざいな言葉を使うが見掛けは良い。上背があり面長。眉、鼻、口の

作りは大きく歌舞伎役者のような男だ。町を歩けば女から声が掛かる。

すつかりしよげ返った卯門を見て言った。

「旦那、今日のところは勘弁してやらあ。世間の事を知らねえ、ひよつこだ。卯門さんよお、あんたたちと付き合うのはなー、礼や金のためじゃあねえんだよ。義理と人情、男気だあね。任侠の世界だ。人間にはな、綺麗なところと汚ねえところがある。誰でも同じよ。それに汚ねえところにも表と裏がある。俺たちは裏を見る。おめえたちは表だ。表じゃ御法度を破る奴らを取り締まる。裏では義理よ。これを欠いた奴らは許さねえ。そこいら辺におめえさんがたとの繋がりがあるのよ。判ったかつ、この唐変木がつー！」

言われつばなしの卯門。だが此処まで抜き下ろされれば逆に気が楽になる。何やらすつきりしてきた。

「半五郎、座つてくれぬか。先程よりおぬしの唾が飛んできて堪らん」

これには半五郎も拍子抜け。さっきは生意気言いやがつて半殺しの目にと思つたが力が抜けた。

「いい度胸してらあ。怒る気もなくならー。ところで静なことだが話はいずれと言つたな。近々酒でも付き合つてもらおうぜ」

「判つた。半五郎、桃若だ」

「おう、そうだった。その詰らん男だが、霊岸島に行つてみな。いるかも知れねえ。名の売れた芸者と連んじやいけねえな。目立つてしようがねえ」

「済まぬ。助かつた」

卯門は立ち上がった。

「旦那、もう一つお土産だ。杉造だがな……。俵屋の亭主が息子に代わつたから、一応、どんな息子が調べたんだが……。いやなに、お得意さんになるかも知れねえからな。杉造は堅物で何も言つて来なかつたがな」

「で、杉造がどうした」

「女房が倒れた時に医者呼んだらしいが、調べた方が良いんじゃないかねえか……」

半五郎は、こう言つと何やらにやつと笑つた。

同じ頃、伊吉たちも手掛かりを掴んでいた。桃若が如何に売れつこ芸者だったかを改めて思い知らされるようであった。見掛けた者は多かつたが、問題は何日頃かであった。伊吉たちは新しい情報を元に、その近辺に聞き込みを掛けていた。数日前に見掛けたとの聞き込みがあった。それは霊岸島であった。

藤次郎たちが話をしていた。

「伊吉は、桃若を知っているな」

「へえ、気風の良い粋な芸者でした。もつとも遊んだことはねえですが」

藤次郎は顔を緩めた。岡っ引きの実入りで遊ぶのは無理である。

「桃若の居所は伊吉に探ってもらおう。聞き込みには注意しろよ。それに居場所が判つても直ぐに踏み込んだりするな。いいな。見張りを置いて戻つて来い。男と一緒に踏み込む。男の方は腕が立つはずだ。人数がいる。それから卯門、おぬしには半五郎が言った医者を探してもらおう。番頭にでも聞けば判るだろう。何か臭う」

桃若の居場所はすぐに判った。霊岸島にある古びた裏長屋。長屋の裏側は海だ。地面はぬかるんでいる。海に近いこともあるが、それだけではないようだ。全く手入れなどされていないような場所である。多分、人別帖にも載っていないような連中が住処すまかにしているであろう。

伊吉は、桃若を見た。

あの桃若がっ、伊吉は目を見張った。深川界限を黒の羽織姿で風を切つて歩いてきた桃若の変わり様は酷いものだった。痩せて老け込んでいる。岡っ引きを遣つていれば、嫌でもいろんな人間を見ることになる。乞食同然だった者が棒手振りから身を起こし店の主人になる。痩せこけていた体はでっぷりと太り大手を振るつて町を歩く。その逆に下り物の初売りに全財産を賭け、負けた大店の亭主。一夜で丸裸。今では気が狂い、涎を流して町を彷徨っている。艶やかだった女が、乱れたままの髪で壊れかけた長屋に入っていく姿に、伊吉は胸が詰った。

卯門は、番頭に何処の医者かを聞いた。居所はすぐに判った。狭い通りだが、一応、表長屋であった。入り口には看板が掛かっている。丸の中に医の字。その下に宗玄齋とある。何度か声を掛けたが誰も出てこない。隣の女房であろうか、もう何ヶ月も帰っていないよと言う。大家のところに行った。

「困ってるんですよ。店賃たなぢはそのままだし行き方知れず。旦那、そろそろ部屋の中の物、売り払っても良いですかねえ。もう一年近く経ちますんで」

卯門は、心張棒が掛かっている戸を打ち破り中に入った。埃だらけではあったが、ちよつと前まで人がいたような雰囲気である。大家によれば病人を診ることは余りなく、薬を作る方が多かったらしい。風体の悪い者も良く来ていたと言う。本人が居なければ杉造との関わりを知ることには出来ない。残念だが、手掛かりは得ら

れなかった。

藤次郎は、奉行に桃若たちを急ぎ捕らえる旨を報告した。三廻り同心は、与力を通さずに直接奉行と遣り取りができる。まだ犯人かどうかは判らない。齒向かつてくれば別だが手荒なことは出来ない。あくまでも事情聴取が目的だ。藤次郎は、奉行に舟を使う許しを得た。長屋の裏側を固めるためだ。

その夜、藤次郎は、卯門と伊吉、その下つ引きに加え、捕り方の十人と共に霊岸島に向かった。船の方は同僚の同心に任せてある。真夜中だが、この方が気付かれずに捕り方たちを配置できる。藤次郎は陽が昇るのを待ち、踏み込むつもりでいる。二人が逃げたとしても明るい方がみつげやすい。いくら奉行所の者とはいえ、このような場所の隅から隅までを知っているわけではない。

秋は深まっている。夜中に吹く海風は冷たい。卯門にとつては初めての捕り物である。襷を掛け、袴の裾を腿掛けした。何とも時間が経つのが遅い。藤次郎を見たが、別段どうという雰囲気はない。普段と同じような感じである。卯門は、貧乏掃すりを始めた。落ち着かないのだ。藤次郎が顔を向け睨んだ。止めざるを得ない。陽が昇った。急がなければならぬ。住んでいる者たちが起きたす前に事を済ませたい。藤次郎と卯門が部屋の前に立った。その後ろには伊吉たちが構える。藤次郎が大声を上げた。

「北町奉行所同心堀田藤次郎だ。戸を開けい！」

中から、どたどたと音が届いてきた。あんたーと女の声。藤次郎が開き戸を蹴破った。と同時に男が飛び出してきた。手には抜き身の長ドス。着物の前が肌蹴け、腹に巻いた真つ白な晒が妙に艶かしい。

「野郎っ！」

男が藤次郎に斬って掛かった。切つ先は鋭かったが、所詮、喧嘩剣法。藤次郎は、さつと体をかわした。卯門は、藤次郎を押し遣り前に出た。男は、右手に長ドスを持ち、足を開いた格好でせいぜい言っている。卯門が言った。

「神妙にしろ。杉造の件で話が聞きたいだけだ。手向かうはおぬしの為にならん。長ドスを捨てろ」

「しやらくせえことをぬかすなっ！ 地獄の道連れよっ！」

男は叫ぶなり、体ごと卯門に突きを入れた。卯門は、ひよいっと体を横に動かして、男の足を払った。もちろん峰打ちである。男は、ドドーツと前のめりに転んだ。

呆気なく御用。

藤次郎たちは部屋の中に入ったが、桃若がいらない。逃げ道は表か裏の海。海の方を見遣ると捕り方の船にずぶ濡れの女がいた。桃若だった。

藤次郎たちは部屋の中を調べたが、切り餅が三つ見付かった。べて七十五両。しかも、包み紙には俵家の判子があった。

(十五)

絹弥は、お通夜のような雰囲気であった。

静は桃若が捕まったと聞いた途端、ぶつ倒れてしまった。今は寝込んでいる。とは言え桃若を心配した余りの気の病。命には別状ない。

芸人とは親の死に目にも会えないもの。中で何が起ころうが仕事を休む訳にはいかない。しかも、客にはいつも通りの笑顔で接しなければならぬ。

絹弥を仕切る者がいない。急遽、琴音が呼ばれた。静が寢床から頼んだのだ。悪いけどあたしが寝込んでいる間、替わりに仕切ってくれないかい。琴音は、弟子の稽古を小吉に頼んだ。小吉の都合の悪い日は稽古は休み。

紗代と志麻も落ち込んでいた。志麻は、卯門が挙げた初手柄であり、嬉しい気持ちもあるが、相手と一緒に暮らした桃若である。やはり寂しさの方が遥かに大きかった。紗代の悲しみは大きかったが、氣丈に座敷を勤めた。だが事情を知る茶屋の女将たちは、健気に舞を躍る姿に涙することもあった。

静が寝込んで三日ほどが経ったであろうか、絹弥に男が訪ねてきた。三人も供を連れてくる。供とは言っても着物の裾を絡げた連中だ。

「お願ひえしやす」

玄関で大声を上げた。はいいと女中が顔を出した。

「恐れ入りやす。壽屋半五郎と申すけちな野郎でございます。こちらの女将が床に伏せたと聞きやして、おみえに参りやした。宜しく、お取次ぎお願ひいたしやす」女中は奥にすつ飛んでいった。どれほど経ったであろうか、静がふらふらしながら出てきた。半五郎は静を見て慌てふためいた。中年増のやつれた姿には妙に艶気を感じるもの。

「静です。壽屋様とのことですが……」

半五郎の片思いなのだ。

半五郎は通りで静を見掛けると後を追ったりした。半五郎は静のことを良く知っているが、静は半五郎を知らない。女中が見舞い客と言ったが、見ず知らずの男を上げる訳にはいかないと、静は仕方なくふらつく体で玄関まで出てきたのだった。「へえ、女将さん、無理に起こしちゃったようで……。いえね、気持ちばかりのお見舞いでして……」

半五郎、背中を丸くし、体の前で両手を揉みながら話す。

「おいつ、土産をこつちに渡せ！」

自分には威勢が良い。風呂敷を受け取ると、そーつと静の方に差し出した。静は静で何にも食べていないためふらふらする。早いとこ帰ってもらいたい。

「これはこれは、ご丁寧に……」

風呂敷包みを受け取った。が、中で何かが動いている。きゃーつと声をあげ、静は気絶してしまった。落つこちた風呂敷からはスッポンがそのそ出てきた。叫び声を聞き、奥から女たちが出てきた。中に半五郎を知る芸者がいた。

「まあ、半五郎親分。どうしたんですか」

と言ったが状況を見て直ぐに理解した。女たちに女将さんの中にと言い、振り返った。

「さつ、帰っておくれ。親分、気持ちには判るけどね、これじゃあ余計、寝込んじやうよ。もうちよつと気が利かないもんかねえ」

半五郎たちは、すこすこ帰っていった。

だが、これで半五郎が静に惚れていると、世間に知れ渡ってしまった。

男の名前は駒吉。奉行所において吟味筋与力である牧村三左衛門の取調べを受けている。だが、知らぬ存ぜぬの一点張り。証拠が揃っているため自白は必要ないが、奉行所としてはそうもいかない。

三左衛門は、別の部屋で桃若を調べた。三左衛門は桃若を知っていた。取調べには卯門も立ち会った。

「桃若、魔が差したのであるうな。お前の座敷は素晴らしかった。それに……お前はどれだけの人間を助けたか。子供が縁日の露店で目かつらを盗んだ。お前はその子を捕まえ論じた。そして子供を露店に連れていき、一緒に謝っていたな。」

爺さんが転んで侍にぶつかつた。侍は血相を変えて爺さんを突き飛ばした。お前は走り寄つて爺さんを助けお越し、侍に食つて掛かつた。あんだ、刀差してるからつて威張るんじゃないよ。年寄りを大切に出来ないなんて人間の屑だよ。侍は、

刀を抜こうとした。お前えは前に出て行き、侍と半歩ほどのところで向かい合った。そして啖呵を切った。さあ、斬れるものなら斬っておくれ。

まだある。冬だったな、あれは。あの時は、雪が降ってた。幼い女の子が鼻緒の挿げ替えて声あげていた。ぶるぶる震えていたな。それを見たお前は、わざと自分の鼻緒を切つて女の子のところに行った。鼻緒を挿げ替えてもらい、金を払い、自分の羽織を肩に掛けてやった。女の子がこんなもの貰ったら親に怒られると言った。お前は、じゃあ明日、返しておくれと言ひ、家を教えた……」

卯門は、居た堪れなくなっていた。もうこれ以上聞きたくない。桃若が口を開いた。

「旦那…… 何でそんなことを……」

「世の中とはな、見ていないようで見ているもんだ。俺は定廻りだったからな。今、喋ったことは、たまたま廻っている時に見掛けたことだ。お前は俺が知っていること以外に、もっと人助けをしていたはずだ。違うか」

「……」

「残念だが、これだけの証拠が拳がっている。罰は免れない。どのような沙汰が下るかは、これからのお調べ次第だ。桃若、話してくれないか」

桃若は、下を向いたままだ。三左衛門も黙ったまま。時間だけが経っていく。何故、二人とも話さない。三左衛門も三左衛門だ、何か喋れ。だが、卯門の思いとは別に沈黙が続いた。小半時ほど経つたであろうか、卯門は息苦しくなっていた。もう耐えられない、と思つた時だった。桃若が、急に突つ伏して泣き出した。凄い声だった。これが号泣というものか。卯門は目を見張った。三左衛門を見たが、相変わらず何も話さずにじっと座っている。桃若はどれ程泣いていたであろうか、泣き声が小さくなつていった。桃若が静かに顔を上げた。

「旦那、ありがとうございます」

卯門の目に、すつきりとした桃若の顔が映った。卯門は、綺麗な顔だと思つた。

桃若が駒吉と知り合つたのは、ほんの些細な切つ掛けであつた。座敷が退け、屋形に帰る途中だった。桐下駄に小石が食い込んでしまった。どうにも歩き難い。それに無理して歩いたためであろうか足首が痛い。仕方なく道の脇にしゃがんで石を取ろうとした。だが、食い込みが酷く石を取ることができない。どうしたものかと困っていると男が寄つてきた。それが駒吉だった。

「姐さん、女のカじや無理だろう。こっちに寄こしな」

見知らぬ顔だった。それに話し方がおかしい。上方の訛りがある。駒吉もなか

なか石を取ることが出来なかつた。必死になつて取ろうとしている駒吉の額には汗が滲んできた。ひよいと、駒吉が顔を向けた。

「姐さん、もうちよつとだ」

駒吉は嬉しそうに言った。桃若は、自分のために汗してくれる駒吉の顔を見て胸がときめた。石は取れたが足が痛くて歩けなかつた。駒吉は背負つて屋形の近くまで送つてくれた。この人は優しい。桃若は駒吉の背中にしがみついていた。体中に熱いものが流れた。

「姐さん、これ以上家に近づかない方がいいだろう」

そう言つて駒吉は帰つた。

この時、桃若には旦那がいた。杉造だ。

杉造は真面目な男だつた。遊びは茶屋遊びだけ。何回か座敷を勤めたが、肩の張らない客だつた。ある日、茶屋の女将から水揚げの話が出た。桃若は驚いた。如何したものか何日も考えたが、杉造であれば氣を使わなくて済む。好きだとの氣持ちはなかつたが、落ち着いた毎日を送れると思つた。それに蓄えも増える。

駒吉に再会したのは、三、四日後だつた。屋形への帰り道、ふと見ると駒吉が立っていた。酔つているようだ。梅若が先日の礼を言つと、少し付き合つてくれと言ふ。惚れた弱みではないが付いていった。待合のようだつた。桃若は、これから何が起きるかが判つたが部屋に入った。死ぬかと思ふほどの喜びだつた。桃若は完全に駒吉の虜になつてしまつた。

杉造との関係も続いた。真面目一方の杉造には仕事の話しかなかつた。体を重ねていても桃若の頭には駒吉がいるようになっていた。ある夜、杉造に家族のことを訊いてみた。杉造は、ぼそぼそと話し出したが、女房は死んでいるし息子は住み込みでない。話は直ぐに終つた。次に会つた時には、杉造の方から女房の話切り出した。顔付きが普段と違つていた。

「あいつは許せない」

「あら、死んだ人にそんな言い方してはいけないんじゃない」

「うるさい。事情も知らないくせに余計なことを言うな」

「当たり前でしょう。あたしは事情なんて聞いてないからね」

杉造が許せないと言つたのは女房の浮気だつた。真面目で大人しい杉造をいいことに、女房はいろんな男と浮氣をした。米問屋の女房だ、金はある。役者買ひもしたらしい。真夜中に屋敷の裏に籠がくる。酔つた女房が帰ってくる。何日か置きに出掛ける女房。諫めれば逆に怒り出す。あんたみたいな詰まらない男はいないよ。

取り得は金だけじゃないか。嫁になんて来るんじゃないか。つたよ。

「酷いことを言われたんだねえ。奥さんは罰が当たったのかねえ」

「へつ、俺だつて馬鹿にされてるだけじゃない」

この話を駒吉にした。駒吉はにやつと笑った。何日か後、駒吉が恐ろしい話をした。杉造は女房を殺しているという。そんな馬鹿な。桃若は信じられなかったが事実であつた。駒吉は、女房が死んだ時に看に來た医者を探し出した。駒吉はこんなことは簡単だと言つた。女はちよつと擦れば何でも話す。どうやら女中から訊いたらしい。桃若は嫌な気持ちになつたが、もう別れることは出来ない。気持ちは離れたいと思つているが体が駄目だつた。

医者を脅すと、杉造に毒を渡したと喋つた。駒吉は、杉造を強請りだした。強請りは駒吉が一人でやつていたが、ある日、駒吉が桃若に言つた。

「あの野郎、何やかんや言つて値切りやがる」

駒吉は苛つていた。

桃若の頭から駒吉と杉造のことが離れない。座敷でも屋形でも同じだつた。駒吉が何か仕出かすのではないか。桃若は座敷に身が入らなくなつていた。大好きだつた芸者。小石が下駄に挟まつたばかりに……。桃若は芸者を辞める以外にないと思つた。

そして、杉造が殺された夜。駒吉が一緒に來いと言つた。行き先は俵屋だつた。桃若は、もうどうとでもなれとの気持ちになつていた。潜り戸を開けて中に入った。杉造は、桃若をみてビックリした。とにかく中へと二人を部屋に連れて行つた。

「旦那、ここで大声を上げるつもりはありませんよ。だが言うことを聞いてもらおうと思ひましてね」

「また強請りだろう。それに桃若、何故、お前は此処にいるのだ」

「……」

「旦那、言つた通りに五十両だして欲しいと思ひましてね。また五両だ十両だなんことを言い出されると困るんでねえ。旦那の可愛い桃若姐さんを連れてきましたよ」

「桃若は関係ないだろう。可哀想に無理に連れてこられたんだ」

杉造は、何の疑いも抱いていなかった。手金庫を棚から下ろし蓋を開けた。中から切り餅を一つ取り出した。

「駒吉、私は金の成る木は持つていない。桃若を残し、これで帰つてくれ」
駒吉の顔色が変わつた。

「てめえ、相変わらずだな」

と言うなり左手で桃若を抱え、右手を懐に入れドスを抜いた。

「いいかい、殺そうなんてつもりはねえよ。ちよいとこの綺麗なお顔に傷を付けさせてもらっただけよ。えっ！ きちんと出したらどうなんだい」

杉造は、急に立ち上がり駒吉に掴み掛かろうとした。駒吉は馬鹿野郎と言いなから立ち上がり、ドスを両手で持ち体ごと突き出した。一瞬の出来事だった。杉造は声も上げずに倒れた。

「余計なことをしやがって」

駒吉は、手金庫の中の切り餅を懐に入れた。

住処に戻った桃若は駒吉に訊いた。何故、こんなにお金が必要なの。

駒吉が昔のことを話した。京都で仕事をしていたが締め出された。仕方なく江戸に来た。同じ仕事をやろうと思ったが同業者の壁は厚く、入り込めない。金を貯め、京都で仕事をしたい。自分を締め出した奴らの鼻をあかしたい。桃若は、仕事は何だと聞いた。だが駒吉は口を閉ざした。

霊岸島に移ったのは、ほとぼりが冷めるのを待ったためであった。そして、あわよくば上がりの船が見付かるかも知れないとの思惑だった。酷い毎日だった。周りに住む連中は得体の知れない者ばかり。身を隠す生活。自分の顔が知れてるのが辛かった。食べ物を買に出掛けたりすると、不思議と知り合いに出会いそうになる。気が変になるかと思った。イライラが募る。何度も駒吉に仕事は何だったのか訊いた。駒吉は五月蠅えなと苛つきながら話した。だが、梅若は聞かなければ良かったと思った。駒吉は女術めづけんだった。何故、自分がこうなってしまったのが判った。駒吉は口封じのために医者も殺していた。

駒吉は白状しなかったが、二人の取り調べは終わった。

駒吉は、人殺しと盗み。奉行所での判決は死罪。調書は老中に差し出された。老中も死罪を認め、將軍の印を受けた。これで駒吉の死罪が確定した。伝馬町の牢屋敷に投獄されている駒吉に、与力が判決を言い渡した。そして、その翌日、刑は執行された。

桃若の審議はもめた。

駒吉と同罪との意見、情状酌量を与えるべきだとの意見。奉行も判断しかねていたが、判決を左右したのは、三左衛門であった。

「桃若は、企てに一切関わっていない。これは駒吉一人の企てである」

「犯行に気付いた時点で訴えることも出来たはずだが、梅若は訴えなかった」

「如何にも。女の性ゆえに悪事に引き込まれ、逃げる事が出来なかった」

「では、この手の事件に於いて、女に対しては常に情状を酌量するおつもりか」

「否。桃若ゆえのこと」

「何故に」

「桃若は心根の優しい女。自らが望みもしなかった魔の手を受けた被害者とも言える。小さいながらも数々の善行。このことは庶民の多くが知っている。果たしてこのような女を死罪にするとは、これで天下の御政道が守られるとお考えか」

「犯罪は犯罪。これを如何にお考えか」

「刑に復し、罪を償うは必至。拙者は、死罪が適切かと申しておる」

「では、どのような刑をお考えか」

「遠島」

「舟は、何処よりとお考えか」

「芝金杉橋」

この段階で奉行が口を開いた。

「永代橋ではないのだな」

「如何にも。小石が挟まったがためにこのような結果に。いつになるかは判らずとも、恩赦との小石を期待しようとする」

「相判った」

(十六)

町の者たちは、桃若が俵屋杉造殺害に絡んでいたことに驚いた。だが、事情を知ると同情の声の方が多かった。

「おい聞いたか。桃若も可哀想だなあ。悪い男に引つ掛かったもんだ」

「芝金杉橋で良かったな。永代橋だったら戻ってこれなかった」

「梅若が死罪だったら、奉行所を頼る者はいなくなっていたぜ。いや死罪でなくて良かった。奉行所も人情ってえもんを判つてらあ」

静は立ち直っていた。

まさかと案じていたことが現実になってしまったが、覚悟は出来ていた。女は、

自分でも理解できない行動をとることがある。桃若も体の方が勝ってしまったのだろう。あんな事をする女ではない。静は、自分の中にもあるであろう女の怖さを考えていた。

紗代は、桃若が言い残した言葉を思い出し出していた。

「男には気をつけなよ。女つてのはね、頭では駄目だと思つても、ずるずる行つちやうもんだからね。あんたなら大丈夫だと思うけど……」

事件のあらましを聞き、紗代はこの意味が判つたように思つた。だが、本当にそんな事があるとは信じられなかったし、信じたくもなかった。

二人を鼻屑にする客たちは、座敷に仕事の話や下世話な話題を持ち込まない。芸を楽しむ、各々の趣味を語り合う。たまには太鼓持ちを呼んで馬鹿笑いをする。そんな彼らだったが、桃若については黙っている訳にもいかなかった。同じ置屋であり、一時は姉さんであったのだ。話さないでいるのは、返つて不自然である。

「大変だったね。ま、世の中にはこういうこともある。誰がこんな縁を振りかけたのかは判らないけどね」

「忘れろつて言つても無理だろうけどね。いや悪い手本として、頭に置いておいた方がいいよ」

「男と女はねー、端からは判らないもんなんだよ。仲の良い夫婦と思つていりやー、三行半だつたり……。喧嘩ばかりしてねえ、別れりゃいいのにと思つていりやー、亭主のしくじりを女房が懸命に庇つたりする。この前も店の金を落とした番頭がいてねえ。主人はカンカンだ。直ぐ返せつてね。そうしたら番頭の女房が店に駆け込んできたよ。必ず返すからつてね。この夫婦、近所でも評判の仲の悪い夫婦だった。女房が啖呵を切つたよ。どうしても今すぐつて言うんなら、あたしが女郎にでもなつて金を作つてやらー……。いや、諭えがいけなかった」

二人は聞いているしかない。どう思つてるんだいと訊かれても答えようがない。ええ、辛いことです。客は氣遣つてくれる訳だが、持てなすのはこっちの方である。氣遣われることへの氣の重さ。話を変えたいが、それはじゃばり。つとめて明るく振舞つているしかない。

志麻は、複雑な思いでいた。桃若を捕らえたのは自分の父であり、堀田を継ぐであろう卯門である。これで良かったのだと自分に言い聞かせてはいるが、何故このような巡り合わせになつてしまったのか、考えても無駄とは思いつつも頭から離れないでいた。

紗代と志麻は、二人になるとこの思いが益々強くなる。紗代には桃若が残した

言葉が、志麻には妙な縁えんじが重く押し掛かっている。気分を変えられるのは、琴音や小吉を訪ねた時だけ。琴音や小吉も男と女の修羅場を見聞きし経験けいけんしている。

「ふふ、そう言うもんなんだよ、男と女は。地獄か極楽かは判らないけどねえ。でもいいじゃないか、其処まで行けたんだ。桃若だつてそうだよ。極楽も経験けいけんしたんだ。今は地獄かも知れないけどね。でも運が良けりや、また這い出せる」

「真面目に遣つてりや極楽に行けるなんてよく言うけどねえ。誰も行ったことなんてないんだよ極楽には。いや行つた人はいるかも知れないけど行つたきりだからねえ。あんたたち、勘違いしないでおくれよ、不真面目に遣れなんて言つてるんじゃないからね」

「死んだ後も気になるけどねえ、極楽や地獄はこの世にもあるんだよ。こっちの方が気になるもんだよ」

「世間が、あの人は極楽だよ地獄だよなんて言うけどね、本当は本人にしか判らないもんだよ」

「こんな人もいるよ。酷い境遇でね、両親が借金を残して死んじゃつた。兄妹が多いし食うや食わずの暮らし。親戚もないんだよ。日雇いで細々と遣つていく以外にない。でもね、そんな地獄のような生活の中にも見つけてみれば幸せはあるらしいよ。人間は強いね」

話を聞いても二人はそう言うものなのだろうと思ふのみであつた。

桃若は、新島送りであつた。

この年は海が荒れる日が続いた。陸地は穏やかな気候でも海は違った。外海は、時化しけだという。流人船は、年に二、三度しか出ない。外海を航行中に時化にでも出会えば、罪人はともかく役人や船頭たちの命が危険に晒される。無理に出航しても、結局、下田か稲取で海が静まるのを待つことになる。桃若は、既に半年以上も小伝馬町の牢屋敷にいた。

桃若が舟に乗る日が決まつたと、絹弥に知らせてくれたのは伊吉だつた。

その日が近付いてきた。舟は昼間に出る。志麻も見送りがあつたが風邪をひいてしまった。静は、辛くて見送れないという。背中を丸め、しょんぼりしている姿を見ると紗代も辛くなる。

その日は、悲しい日だというのに陽差しの強い日だつた。

芝金杉橋付近には、大勢の者が見送りに来ていた。紗代は人を掻き分けて前方に行った。囚人たちは、はしけに乗せられ品川沖の本船に移される。はしけは屋形舟が使われ、男囚は舳先の方に、女囚は艫の方に座らされる。

はしけが来た。紗代は必死になって桃若を捜した。居た。シャンとしている。綺麗な顔だ。涙を流しているようにも見える。紗代は叫んだ。

「桃若姉さん。姉さん」

周りにも見送る者の名前を大声で叫ぶ人たちがいる。紗代は、叫び続けた。桃若が気付いたようだ。驚いたような顔を紗代の方に向けた。紗代を見つけた。

「梅若——」

確かにその声は紗代の耳に届いた。桃若が大きな口を開けて何か叫んでいる。

紗代は、必死に耳を澄ませたが、周りの声にかき消されて聞き取れない。姉さん、姉さん……。はしけは、遠ざかって行った。

紗代は、真っ直ぐ屋形に帰るべきだったのだろうか。

——姉さんは何を言いたかったのだろう。叫んでいた。大きな口を開けて……。あんなに必死になつて。

紗代は歩いた。ふと気付くと花見橋の上であつた。欄干にもたれて川の流れを見ていた。川の水が流れ去っていく。紗代は時を忘れて流れを見ていた。強い陽射しが、容赦なく紗代に照り付けていた。紗代は川の水が動いているのか自分が動いているのか判らなくなった。水が止まっているように見えた。そして、自分が後ろの方に流されていくように感じた。ふーっと紗代の意識が薄れていった。

気付くと薄暗い部屋にいた。見えるのは染みだらけの天井。自分は着物を着たまま寝ている。ふと頭に手を遣ると、湿った手拭いがあつた。紗代は、部屋を見回した。庭からは月明かりが入っている。狭い古めかしい部屋だが、掃除が行き届いているのか清潔な感じがした。布団の傍には、小さな手桶が置いてある。

ガタツと入り口の戸が開いた。見ると若い浪人風の男が入ってきた。紗代は、薄目を開けて男を見ていた。月代は剃っていないが綺麗に揃えられている。手に何かを持っていた。顔は見えない。男は手に持ったものを茶筍筒に入れてから紗代の傍に来た。紗代の頭に置いた手拭いを取り、手桶に入れた。その手拭いを絞り、紗代の頭に乘せた。男の体からは丁子油のような匂いがした。

紗代は、どうすればよいか判らなかつた。

——このまま寝ていた方が……。でも何時まで。

男が傍を離れた。紗代は、小さな声でウーンと唸ってみた。男は行灯の方に行

き、カチツカチツと火打石を打っているようだ。部屋の中が明るくなった。

「あの一」

男は何も言わずに紗代の身を起こした。男の顔を見た紗代は、ぎよつとした。整った彫りの深い顔。だが、その顔には表情が見えない。顔色は透き通ったように青白い。何よりも紗代を驚かせたのは、凍るような大きな目であった。

男は紗代と目を合わせたが何も言わない。男は、そつと紗代の額に手を遣った。全く表情のない顔に、ほんの少しだが笑みが走ったようだ。

男は紗代の腰付近に手をやり、紗代をそつと立たせた。紗代は、ふらつかなかつた。それを見た男は、紗代を座らせ、自分は火鉢の方に行った。熾火に炭を乗せ土瓶を乗せている。茶箆筥から急須と茶碗を出し、先ほどの包みを手に持つて座つた。

紗代は、男が動くたびに丁子油の匂いが流れるのが気になっていた。湯が沸くと男は茶を入れて包みを開いた。餡ころ餅だ。紗代の前に出し、食べると手で示した。紗代は黙つて餡ころ餅を食べた。そう言えば今日は何も口にしていない。美味しい餅だった。

男が口を開いた。

「既に木戸は閉まっている。拙者は外にいる。おぬしは此処で寝なさい」

男が立とうとした。紗代は咄嗟に言った。

「いえ外は寒いはず。身の危険は感じておりません。此処にてお休みください」

男は、紗代の言葉を無視して表に出て行った。紗代は横になったが、眠れるものではない。まんじりともできなかった。

寝てしまったのだろうか、気が付くと雨の音。しかも外は明るい。男のことが気になり、戸を開けた。何と男は庇の下に立っていた。着物はびしょ濡れである。

「申し訳ありません。私のために」

男は、相変わらず何も言わずに部屋に入り、庭の方を向いて座つた。紗代に背中を見せたまま話し出した。

「あいにくの雨だ。拙者、番傘も持つておらん。長屋の連中とも付き合いはござらんゆえ、借りることも出来ぬ。相済まぬとは思うが、雨が上がるまで待つほかない」
今日は、お座敷がある。八ツ頃までには帰らないと……。そう思った途端、紗代は笑い出してしまった。このような時に仕事を考えると。男が振り向いた。紗代は改めて男の顔を見た。冷たい表情。ゾツとするような冷たさ。

「す、済みません。急に笑つたりして……」

微かに男の表情が動いたようだ。

「助けていただきました。ありがとうございます。お礼を申し上げるのが遅くなつてしまいました。お許しください」

男が体を動かし、紗代の方に向かって座りなおした。

「何故におぬしを助けたのか、拙者にも判らん。女子が倒れていようが拙者には関わりのないこと。今は、余計なことをしたと思つておる」

「ご迷惑を……」

「そのような意味ではない。番傘も持たぬ者が人を助けるなど片腹痛い」

そう言うのと、また庭の方に向き直つた。

「あのー、まだお名前も…… あつ、失礼いたしました。私もまだ。私、絹弥の梅若と申します」

「芸者か。もう会うこともあるまいが…… 拙者、神谷慎吾と申す」

雨で空気が湿っているためであろうか、丁子油の匂いが強い。紗代は気になつて仕方がないが訊く訳にもいれない。紗代はこのまま雨が上がるのを待つ以外にないと思つた。沈黙が続いた。部屋の中には湿つた空気と丁子油の匂い。紗代は、ふと別の匂いを嗅いだ。

——これは…… 血だ！

丁子油は消毒のためだったのか。見れば慎吾の左腕から細い血の筋が……。紗代は、さつと立ち上がり慎吾の左の袖を上げた。

「おぬしつ、何をするつ！」

腕に巻いた手拭いは血で真っ赤であつた。まだ、血は流れている。昨夜は血の匂いはなかつた。傷口が開いたのだろう。紗代は帯紐を解き腕を縛ろうとした。

「余計なことをするものではない。おぬしには関わりのないこと」

慎吾は声を上げ、紗代を突き放そうとした。だが、いざとなれば女の方が度胸は上。紗代は慎吾の頬を厭というほど打つた。

「慎吾様には余計なことかも知れませぬが、あたしにとつては恩返し。どうしても嫌と言うのであれば、叫び声を上げるやも知れませぬ。その様にしても宜しいでしょうか。長屋の方たちが来るでしょう。連れ込まれ、手籠めにされ掛かつたとも言えば、自身番からも人が来るはず」

これを聞くと慎吾は大人しくなつた。

二の腕には手拭いが巻いてある。紗代は、肩の近くを帯紐で縛り、手拭いを解いた。刀傷のようだ。傷口は塞がり掛けているが、下の方がパツクリと開き、血が

流れていた。慎吾に訊いたが晒さらはないと言う。紗代は、襦袢の片袖を引き千切つて傷口を縛った。慎吾は何も言わず、紗代の手当てを見ていた。

紗代が顔を上げると慎吾の顔が間近にあった。近くで見ると慎吾の目は、恐ろしくくらいに澄んでいた。綺麗な水を見ていると引き込まれそうになる事がある。今、紗代は同じ思いに…… いけない！ 紗代は、思わず目を逸らせた。慎吾は一言、済まぬと言った。

「お医者さんに診てもらった方が良いのに……」

外を見ると雨は上がっていた。

「もう濡れないであろう」

紗代は、何故か去りがたい気持ちに駆られたが、ふと桃若の言葉を思い出し苦笑した。私がこの人を…… そんな事はありえない。紗代は丁寧にお礼を言い長屋を後にした。

(十七)

紗代が絹弥に戻ると、静と志麻が飛び出してきた。無事であることを知ると、静は涙を溜めた目で紗代の頬を打った。

「心配掛けるんじゃないよ。桃若を見送りに行ったきり……」

紗代は見送りの帰りに眩暈がして倒れてしまった。気が付くと長屋に寝ていた。親切な人で一晩休んでいけと言われ、言葉に甘えたと話した。だが、相手が慎吾だとは話さなかった。

その三日後であった。

絹弥に呉服屋の小僧が来た。梅若さんに届けるように言われたと風呂敷包みを渡した。紗代が開けると長襦袢であった。しかも上等なもの。慎吾であろう。紗代は訝いぶかった。片袖を使ったとはいえ、このような上等なものを……。あの様子では暮らしは苦しいはず。助けられたのは私の方……。

翌日、紗代は襦袢を持って長屋に行った。表から声を掛けると声が出た。

「神谷殿は不在じゃ」

慎吾の声ではない。紗代は、渡すものがあるので中に入りたと言った。戸が開いて羽織袴姿の侍が顔を出した。見れば、五十絡みで物腰の柔らかそうな侍であ

る。これを預かりましたが、お返しに来ましたと言ひ、風呂敷を渡そうとした。侍は躊躇していたが、拙者が替わりに受け取る訳にはいかぬと丁寧に頭を下げた。まさか強引に部屋において帰るわけにもいかない。紗代は、風呂敷を持ち帰った。

絹弥は、落ち着いた毎日に戻っていた。

ただ一つ困ったことが起きていた。壽屋の半五郎である。町では、壽屋半五郎が絹弥の女将に惚れたと面白おかしく噂されていた。半五郎は噂を喜んでいたが、静は迷惑がっていた。

ある日、静が藤次郎の屋敷に顔を出した。卯門もいる。

「旦那、あのような噂を立てられちゃー商売に差し支えます。何とかしてくださいよ。いい加減にしないとふん縛るとでも言っていたら、大人しくすると思ひますけど……」

何も奉行所が扱うことではないが志麻が世話になっている。藤次郎は卯門に言った。

「おぬし、何とかしてやれ」

卯門は顔を顰めたが、半五郎といずれ呑むと約束したことを思い出した。例の事件では世話にもなっている。半五郎に会うことにした。

「卯門の旦那も義理堅いお人だ。こうやって約束を守る。あつしは気に入ったね」
半五郎は酒に弱いのであるうか、真つ赤になっている。

「ところで、おぬしが噂を流しているのか」

「とんでもねえ。旦那、火のないところにつて言いやすが、そんな事じゃねえですか」

「火などあるのか」

「いや、まだです。ただあつしが見舞いに行っただけ……」

「ほう、それだけか」

どうも半五郎の様子がおかしい。しょぼんとしだした。

「旦那、手を貸しちゃーくれませんか。お静のことを考えると夜も眠れねえんで。頼みますよ、仲を取り持ってくれませんか」

半五郎が頭を下げた。卯門は面倒なことと思つたが、半五郎のしおらしい姿を見ると、無下に放つぱり出す訳にもいかなと思つた。

卯門は頭を痛めた。まだ男女の機微も判らぬ拙者に何が出来るというのか。ま

まよ何とかなるであろう。屋敷への帰りしな、その足で絹弥に行くことにした。玄関で声を掛けると、志麻が出てきた。志麻に会うのは久しぶりである。すっかりあか抜けした姐さんの雰囲気である。卯門は気後れがした。

卯門は静の部屋に通された。志麻も一緒だ。

「女将、一度で良い、半五郎に会ってみてはどうだ。迷惑なら迷惑と女将の口から直接言った方が良いと思う。さすれば本人も諦めるであろうに」

「嫌ですよ。何をされるか判ったもんじやない。やくざの親分なんて……。手籠めにでもされたらどうするんだい」

志麻がむきになって言った。

「まあ、惚れた相手にそんな事はしませんよ。ねえ、卯門様」

「そ、そうじゃな」

「女将さん、磯部なら良いんじゃないかしら。気が知れてるし……。ねえ、卯門様」

志麻は一々、卯門に同意を求める。その度に志麻は卯門を見つめる。卯門は志麻が眩しくて仕方がない。

「女将、そういたそう。日取りを決めてくれ」

数日後、静が磯部から帰ってきた。志麻は、紗代にも事情を話している。二人で静の部屋に行った。静は酒が入っているのであろうか、ほんのりと赤い顔をしているが、どうも様子がおかしい。何やら遠くの方を見つめている。

「女将さん、どうでした。半五郎親分は諦めてくれましたか」

静は、ふっと顔を二人に向けた。あら、あんたたち居たのとても言いたげな顔付きである。箱火鉢に肩肘を付き、掌に顎を乗せて言った。

「あたしや、半さんに惚れちゃったよ」

「えーっ！」

二人は、顔を見合わせてしまった。静が、ポツリポツリと話し出した。

座敷には半五郎と二人きり。良く見れば、歌舞伎役者ばりの顔。ぞんざいな話しっぷりには呆れたが、態度はきちつとしている。

静を初めて見た時に胸が高鳴った。俺は、何人もの女を知っているが、こんなことはなかった。自分は、静に惚れたと思った。日に日に思いが募っていく。このままでは仕事も手に付かない。どうか、助けると思っ一緒になってくれ。半五郎は言うなり両手を付き、べたべたと頭を畳に擦り付けたと言う。静は、絆ほだされるってこう言うことかと心が動いたらしい。悪い気持ちではなかったが、つい言っ

まった。

「でもねえ、あたしは、もう若くないよ」

この言葉を聞いた半五郎。今度は、お説教が始まったという。そのようなことを言っただけではない。如何に静がいい女かと、長々と喋り続け、挙句の果てに、また、ペタペタと頭を下げた。

静が、さあ、頭をあげてくださいいなと肩に手を置くと、半五郎は、その手をひしつと握り、じつと見つめたという。

「あたし、半さんと一緒になる」

言ったが最後、静は、けたたましく動き出した。まず、誰とも相談せずに置屋と茶屋の世話役の所に行き、琴音に絹弥を譲る旨、手筈てはずした。世話役は、呆気にとられたが手続きは怠りなし。受けざるを得なかった。

これを聞いた琴音が駆け込んできた。

「女将さん、これはどういふことなんですか。勝手に譲るなんて。第一、あたしには大勢お弟子さんがいるんですよ」

「あらっ、小吉と一緒に遣れば問題ないでしょう。この前、あたしが寝込んだ時に遣ってくれたじゃないか」

「あの時はあの時。小吉さんには言つてあるんですか」

「いや、まだだよ」

「いい加減にしてくださいよ。あたしは嫌だからね」

「まあ、あんたつてそんなに冷たい女だったのかい。あたしや絹弥がどうなつても良いつて言うんだね。いいかい。あたしがやっとなんか恋なんだよ。それを……あんたは壊そうつて言うのかい。酷いじゃないか。もつと優しい言い様をしてくれても良いんじゃないかい」

静は聞き直ってしまった。

琴音は、やっとなんか恋と聞いた途端に大人しくなった。恋……。受けざるを得なかった。小吉は何と言うだろうか。あたしが説得するんだろうね。

静は、絹弥の全員を集めて挨拶をした。

「今まで皆にはお世話になったねえ。礼を言いますよ。でもねえ、世の中、何が起ころか判らない。琴音さんと一緒に絹弥を宜しくお願ひしますよ。たまには壽屋にも遊びに来ておくれ」

そう言うど、静は、さっさとやくざの親分の女将さんに納まってしまった。

琴音は、小吉と話したが、小吉はあっさりと二人で楽しく遣っていきうよと言った。絹弥には、今までよりも、さらに気風の良い雰囲気が流れだした。

そんな中で、紗代一人がもの思いに耽っていた。

——あの刀傷は何故……。もう、治ったのだろうか。

不在にもかかわらず、あの侍は部屋にいた。慎吾とはどのような関係なのだろうか。

何よりも紗代の心をとらえていたのは、慎吾の寂しげな澄んだ目であった。そして、あの冷やかな雰囲気。紗代は、座敷で若い侍たちを見ているが、慎吾のよくな侍を見たことはない。町を歩く時に、若い侍や浪人をそれとなく見てしまうが、慎吾は、彼らとは違っていた。何故、あのように冷たい寂しげな目を……。

——いえ、あの人にも暖かい心はあるはずだ。さもなくば倒れていた私を助けたりはしない。紗代は、慎吾が時折見せた笑みを思い出していた。慎吾の顔を思い浮かべるたびに、その笑みは大きくなっていく。紗代は、慎吾に思いを寄せている自分に気が付いた。だが、たった一度しか会っていない。私は、勝手に思い描いているだけなのかも知れない。紗代は、そんな自分が嫌になつていった。このままでは、在りえない夢想に陥つてしまう。そして、その中で慎吾への思いを募らせていくに違いない。紗代は、襦袢を持つて慎吾に会わなくてはと思った。返さなければならぬ。もう一度、会つてみよう。会えば、自分の思い描いた慎吾と違うかも知れない。いや、幻滅を感じるかも知れない。つまらない思いは消えるに違いない。その方がよい。

紗代は、琴音に嘘を言った。

「女将さん、兼松に寄りますので、帰りは遅くなると思います」

「神谷様は、いらつしやいますでしょうか」

中から、戸は開いていますと慎吾の声が聞こえた。紗代は戸を開け、中に入った。慎吾は、部屋の真ん中で腕を組んで座つていた。紗代は部屋に上がつて慎吾の前に座つた。そして、慎吾の顔を見た。紗代は愕然とした。思い描いていた慎吾は冷たいだけの男だったが、其処には眩暈がするほど艶めかしい慎吾がいた。紗代の胸が高鳴つた。

——来なければ良かったのでは……

紗代は、震える手で風呂敷包みを前に置き、襦袢を出した。

「慎吾様、このようなもの受け取ることは出来ません。襦袢の袖は助けていただきたいお礼。あれにて、けりは付いたはず……」

慎吾は、無言のまま澄んだ目で紗代を見ている。紗代は、慎吾の目に感情の動きを感じなかった。だが、自分は、その目に吸い込まれていくのが判った。

「傷は……」

その時、慎吾の顔に笑みが走った。そして、静かに口を開いた。

「では、こちらをお返しすれば良かったのでしょうか」

慎吾は懐に手を入れた。そして、あの襦袢の袖を出した。

袖は綺麗に畳んであった。洗ったのであろうか、血の痕も見えない。紗代は、訳が判らなくなつた。

——何故、慎吾様は、この袖を懐に……

慎吾は笑みを浮かべたまま、紗代を見つめている。紗代は眩暈がした。そして、体から力が抜けていった。

慎吾は優しくかつた。喜びの中で慎吾が梅若と呟いた。紗代は、小さな声で言った。

「私は、紗代……」

紗代は、どのようにして絹弥に戻ったのか覚えていなかった。

(十七)

三吉が戻り、兼松では店の増築が行なわれた。料亭風の店である。一階は、一膳飯屋の造り。二階には、座敷を三部屋造つた。

三吉は、つなぎに自然薯を使って蕎麦を打つた。打ち棒で薄く延ばし、細い蕎麦を切つた。綺麗な蕎麦である。掛け蕎麦の汁は、出汁を利かせた薄味。笹蕎麦の汁は、出汁の強さと同じくらいに醤油、味噌を利かせた。天麩羅は、掛け蕎麦、笹蕎麦に関わらず、笹に別盛りとした。好みで掛け蕎麦に乗せても良い。天麩羅の油が汁に溶けるのを好む客も多い。

二階を使う客の中には、芸者を呼び三味線、鳴物を楽しむ者もいた。一階の客も喜んだ。

「いいねえ、お三味を聴きながら井飯が喰える。こりゃ乙なもんだ」

兼松の女将は、おトヨである。別に株を買う必要はないが、兼松で芸を売るには、寄り合いに料亭として認めて貰わなければならない。世話役は渋ったが、琴音と静が頑張ってくれた。静は、壽屋の女将としてやくざたちを束ねている。壽お静と言えば、その道では知らない者がいないほどになっていた。世話役も、お静さんが言うのであればと認めてくれた。

紗代と志麻も兼松の座敷に呼ばれた。紗代が、座敷を勤める時には喜助もおトヨも目を潤ませて料理を作り、運ぶ。三吉も、ふと蕎麦を打つ手を休め、耳を傾けている。

志麻は、時間が空くと実家に帰ることが多くなっていた。卯門は、まだ見習いだったが、府内においては既に定町廻り同心として認められていた。卯門を育てたのは藤次郎だが、卯門を一回り大きくしたのは桃若の事件に携わり、多くのことを経験したためである。特に、吟味筋与力牧村三左衛門の影響は、卯門の人間性を目覚めさせていた。どのような相手であれ、広い視野で相手に接する。人間は、一面だけで捉えてはいけない。以前は、詰らんと思っていた訴えに対しても、耳を傾けた。そして、大勢の人間を知ろうと思っていた。

紗代と志麻は、たまにだが、二人で兼松に行つて食事をする。志麻は、兼松に来ると気が休まるのであろうか、よく卯門の話をするようになっていた。志麻は、楽しそうに卯門のことを語る。紗代は、いずれ二人は一緒になると思つた。

紗代は、誰にも気付かれないように慎吾と会つていた。これは、志麻にも語れない秘めた恋である。慎吾とは、長屋で会つた。紗代は、慎吾の食事を作りたかつたが、米を研いだり包丁を持つことは、芸者には許されないことである。慎吾は、己の身の上や、今何をしているかなどについては、一切口にしなかつた。常に身奇麗であるし、貧した部分はなかつた。紗代は、禄も扶持もない浪人でありながら、何故、貧したところがなつか不思議に思うこともあつた。それに、慎吾は長屋に居ることが多い。紗代が長屋に行くと、常にと言つて良いほど部屋に居た。紗代は、何故、刀傷を負つたのか、あの年老いた侍とは、どのような関係なのかが気になつていたが、訊くのが怖かつた。

ある日、慎吾が遠出をするため、半月ほど会えなくなると言つた。紗代は、何やら胸騒ぎがした。遠出とは…… 何処に、何をしに……。だが、紗代は訊けな

った。

今年は、三年に一度の八幡様のお祭りがある。まだ、三ヶ月も先であったが、紗代と志麻は、早めに手古舞の衣装を作ることにした。この世界に入る切っ掛けは手古舞である。手古舞を踊りたいとの思い。だが、その憧れは、辰巳芸者である自分たちの一つの仕事と考えられるようになっていた。

呉服屋を廻りながら、二人は出会った時のことを思い出し、語り合った。侍の子は生意気だと言ったね。お父さまって呼んだでしょう。あたしはおとっちゃんと呼んでいたけど、父さんに変えたのよ。花見橋で会った時は驚いたね。二人で川の流れを見たね。話は尽きなかった。

(十八)

藤次郎は体を壊していた。

町奉行所の仕事は、他の職務に比べ激務と言えた。危険も伴う。職務中に命を落とす者や体を壊す者も多い。定町廻りと臨時廻りには月交替がない。特に定町廻りは、毎日府内を廻らなければならない。暑い日、寒い日、雨、風、雪の日……。非番は、仲間との相談でとるが、訴えが多かったりするとそうもいかない。お役ご免を願い出ることはい出来る。だが、藤次郎は、卯門が堀田を名乗るまでは同心を続けようと思っていた。志麻と卯門……。父親の自分にも、どうなるか判らない。志麻が家に帰ると、卯門と志麻は、楽しそうにしている。後二、三年で志麻の年季は明ける。自ら望んで芸者になったのだ。年季に縛られることもあるまいに。置屋での費えが残っているのであれば、払ってあげても良い。志麻は、年季が明けても目前で芸者を遣るのだろうか。

藤次郎は、志麻の気持ちを知りたかった。それに依って、卯門を養子とするか婿として受け入れるかが決まる。

「卯門、真面目な話があるのだが、良いか」

藤次郎は、卯門の気持ちも訊いておきたかった。

「はっ、堀田様、何なりと」

卯門は堀田様と呼ぶが、当初から水臭いと気に喰わなかった。

「卯門、そろそろ父上と呼んだらどうじゃ」

「いえ、そうは行きませぬ。きちんとせねばなりません。で、お話とは……」

「……志麻のことだが、おぬし、どう思っておる」

「どうとは……」

「鈍い男じゃな。どう思っているかと訊けば判りそうなものを。嫁にする気はあるのか」

「何事かと思いましたが、そんな事でございますか」

「そんな事だとっ！ この戯け者が。一番肝心なことではないか」

「志麻殿に初めてお会いした時から、心に決めております」

「初めて会った時に決めた。どのように決めたのだ」

「はっ、拙者の嫁にすると」

「何と、本当か。何故、もつと早くに言わん」

「お訊きになりませんでしたし…… 堀田様も、そのお積りと思っておりましたゆえ……。失礼ですが、このこと、今、お知りになったのでございますか」

「如何にも」

「これはこれは、今まで拙者に対し、鈍い男と申されておりましたが、堀田様も……」

藤次郎は、怒ってよいものやら喜んでよいものやら、奇妙な顔になった。

「で、志麻とは、約しておるのか」

「いえ」

「何を遣っておるのじゃ。急げ」

「そうは参りませぬ。堀田様は志麻殿に好きに生きよと申されました。拙者も同じ考え。志麻殿が拙者を婿にと申すまで待つ積りでおります」

「もし…… 志麻がその積りがないと申したら、おぬし如何する」

「はっ、その様なことはないと思っております」

「つまり、志麻は必ずおぬしと夫婦になりたいと申すという訳か」

「如何にも」

藤次郎は、志麻に卯門をどう思っているのか訊こうと思っていたが止めた。

翌早朝、伊吉が藤次郎の屋敷に来た。

「大旦那、回向院の近くに原っぱがありやすが、そこで侍が殺されました」

藤次郎と卯門は伊吉と共に回向院に向かった。侍を見たが、見掛けぬ顔であつ

た。伊吉たちも知らないと言う。侍は左肩から右腰まで一太刀で斬られていた。他に傷はない。侍の刀は、すぐ側に落ちていた。刀を構え、対峙したはず。余程、腕のよい者の仕業。見事な袈裟懸けである。どうやら刀を交えることもなかったようだ。このような場所で侍が偶然に出くわすことなどない。果し合いか、または騙し打ち。いずれにしても、何らかの理由により此処で待ち合わせたと考えられる。回向院の境内であれば、寺社奉行の管轄になるが、現場は離れている。旗本か御家人の仕業であれば目付、浪人か町人であれば町奉行の管轄になる。とは言え、初動捜査は町奉行が担う。

藤次郎と卯門、伊吉、そして、下つ引きは辺りを隈なく探った。何でも良い、手掛かりはないか。下つ引きが頓狂な声を上げた。

「こんなものが落ちてますよ」

見れば、四角に畳まれた布のようだ。卯門は広げてみた。

「襦袢の袖ですな。男が持つとは思えん。通りすがりの女が落としたのであろう」
皆が頷いた。卯門は、捨てるのも何だと思ひ、元のように畳みなおして懐に入れた。

殺された侍は自身番に運ばれた。風体は侍であり、浪人とは思えない。目付が来て調べたが、やはり見覚えがないと言う。面倒だが、侍は大八車に乗せられ、北町奉行所に運ばれた。大目付も調べたが身元は判らなかつた。

「何処ぞの藩士ではないか。参勤で江戸に来たのであろう。老中に報告し、大名か江戸家老連中に問うてもらおう。昨夜、藩邸に戻らぬ藩士がおればすぐに判る」

大目付は、そう言い残して奉行所を出ていった。大目付は、すぐに身元が判ると思つた。侍に無断外泊は許されていないからだ。

この日の夕刻、奉行所に思わぬ知らせが入った。松木藩江戸家老の一人である塚本莊司が、切腹して果てたという。遺書があつた。我が息子、信太郎を成敗した。息子が犯した罪は親の責任。お詫びして切腹する。

大目付が調べたが、遺書には事細かに経緯が記されていた。塚本は、何事にも几帳面な男であり、藩主からも重きを置かれていた。

遺書によると、信太郎は国で同僚を殺害したらしい。理由は借金であつた。信太郎は放蕩息子と評されるほどの遊び好き。同僚らに遊ぶ金を借りていた。莊司が、幾ら諫めても駄目であつた。運悪く、莊司は江戸詰め家老になつてしまった。信太郎を江戸に連れていくわけには行かない。江戸の方が遊ぶ場所が多い。

国許からの知らせでは、信太郎は同僚を殺害し国を逃げ出したという。荘司は頭を痛めていたが、信太郎がひよっこりと江戸屋敷に顔を出した。荘司は、自首を進めたが言うことを聞く息子ではなかった。金をくれれば江戸を離れる。だが、荘司は、なおも自首を進めた。それに対し信太郎は、金を寄こさないのであれば江戸で騒ぎを起こし、塚本の名を辱めると脅したという。親に対しての脅し。荘司は、自ら信太郎を成敗しなかったが刀は信太郎の方が上。致し方なく刺客を雇い殺害を頼んだ。信太郎に金を渡す積りだが藩邸では拙い。回向院横の原っぱで待て。金を受け取り次第、その足で江戸を離れてくれと伝えた。荘司は、刺客と共に信太郎を待った。信太郎は二人を見た途端、謀ったなど刀を抜いた。刺客は無表情のまま信太郎を一太刀で斬った。荘司は、その場で切腹をと思ったが事を明らかにしてから死にたかった。

幕府にとっては身内のいざこざによる事件であり、荘司の切腹により結審したことになる。塚本家は取り潰されるはずだが、これは藩主の仕事である。

町奉行と大目付は老中の管轄下にある。町奉行は、刺客の捜査を行なう旨、老中に言ったが、老中は大目付の意見を採った。

大目付は、これほど手馴れた仕業が出来る刺客である。探しても見つかると思えない。無駄なことは止めるべきだ。老中は町奉行に放っておけと命じた。藤次郎たちにとっては釈然としない事件であったが、奉行の命令には従わざるを得ない。こうして、この事件は終わった。

卯門は、襦袢の片袖が気になっていた。まさか通りすがりの女が誰かに襲われ千切れたのでは……。いや違う。四角に畳んであったのだ。では、誰ぞが捨てたのか。これも違うだろう。きちんと畳んだまま捨てるのは不自然だ。考えられることは、誰かが落としたと言うこと。襦袢の片袖である。多分、女であろう。卯門は、この事を志麻に話した。志麻は、紗代との雑談の中でこのことを話した。これを聞いた途端、紗代の顔色が変わった。だが、志麻は紗代の変化に気付かなかった。

紗代は慎吾の長屋に走った。頭の中は真っ白だった。

引き戸には空家の張り紙。紗代は、差配の大家のところに行った。戸を叩くと大家が出てきた。神谷様は……。大家は黙って紗代を部屋に入れた。

「失礼だが、紗代さんかな」

「は、はい。神谷様は……」

「先日、急ぎ国に帰らなければならなかったと挨拶に来ましてな。その時、頼み

がある」と申されました。拙者を訪ねて紗代と申す者が来るはず。急ぐゆえ拙者が手渡すことはできぬ。相済まぬが、これをお渡し願いたいとな」

大家は、そう言うのと押入れから風呂敷包みを取り出し、紗代の前に置いた。紗代は、震える手で風呂敷を解いた。中には、あの襦袢があった。襦袢の上には文が……。紗代は文を懐に入れた。紗代は、風呂敷包みを抱き、ふらふらと歩いた。頭には、慎吾の笑顔があった。気付くと花見橋の上。欄干に身を寄せ、文を取り出した。震える手で文を開いた。其処には、一行だけ書かれていた。

紗代、もう逢えぬが、忘れん

(十九)

華やかな行列が進んでいる。木遣りと共に男衆の格好をした粹な芸者衆の手古舞が続く。その中に、志麻も紗代もいた。笑顔満面の志麻。周りの者には、紗代の顔にも笑顔があるように映っていた。私は芸者、辰巳芸者。悲しみを顔に出してはいけない。

紗代と志麻は、二十歳を過ぎ、もうすぐ年季が明ける。二人は、語り合った。

「紗代さんは、どうするの」

「私は自前で遣っていくつもりよ。志麻さんは……。いえ何も言わないで。私が言っただけ。芸者を辞めて卯門様のお嫁さんになる。そして、子供を産んで堀田家を守るの。でも、同心稼業は実入りが少ない。二両親と喜和さんは植木を作るけど、それだけじゃ足りない。そこで、志麻さんは、近所の人たちにお琴や三味線を教える。そして、卯門様と大手を振るって通りを寄り添って歩く」

「あらーっ！ 驚いた。その通りよ」

二人は、涙を流して笑った。だが、紗代の涙には悲しい涙も含まれていた。

(二十)

年月は流れた。

藤次郎は、卯門と志麻が一緒になったのを見届けた後、病で逝った。

卯門は、堀田卯門影清として定町廻り同心を続けている。町では、情けの卯門

と呼ばれ、大勢が頼っている。伊吉も歳をとったが、頭の切れ味は衰えていない。兼松は、三吉が後を継いでいる。喜助は隠居した。喜助は、三吉の顔を見ると嫁を貰えという。おトヨは、紗代と一緒になれと言う。早くしないと紗代は子供を産めない歳になつちやうよ。だが、三吉は笑っているだけ。

小吉は、版元の女房が死んだ後、家に入った。大吉亭狒犬が小吉だということ、まだ世間に知れていない。

琴音は、一人で絹弥を守っていた。

「何であたしには言い寄ってくる男がいないのかねえ。お静さんが羨ましいよ」
そのお静だが、いつも半五郎と一緒に箱火鉢の前に座っている。二人とも鍼こそ増えたが、まだまだ矍鑠としたもの。自分の前では半五郎を立てる静だが、二人きりになると、あの妓に色目を使ったとか煩く言う。半五郎は、首を引つ込めて聞くしかない。お静は、でっふりと太り、まるで焼き物の大狸。天下は、私のものでも言いたげな様相である。

志麻には、子供が三人出来ていた。長男を筆頭に女の子が二人。屋敷で稽古事を教えているが、お弟子さんも多い。

紗代は、自前として辰巳芸者の名を欲しい俵にしている。志麻が幾ら進めても、旦那もとらず、嫁にも行かない。

「あたしは一人が好き。それに芸者も好き。いずれは、兼松の二階で、お三味でも弾いてお客さんと楽しみたい」

さらに年月は流れた。

昼間の暑さを忘れさせるような涼風が、大川の川面を渡っている。川沿いにある小体な仕舞屋造りの紗代の家。浴衣姿の紗代と志麻が、二階で熱い茶を啜りながら、開け放った窓から大川を見ている。窓からは、花見橋が見える。

部屋には心地良い風が流れ、座敷簾が緩やかに揺れている。二人の傍には豚の蚊遣粉が置いてあり、細い煙を燻らせている。蒸し暑さは感じないが、二人は所在なさげな様子で団扇を手をしている。時たま思ひ出したように浴衣の袖口に風を送ったり、蚊を追ったりしている。

「どうだろうねえ、そろそろ互いに生まれ月を教え合っても……」

「ふふ、今更と思うけど……。二人が内緒にしているのは、生まれ月だけ。内緒のままお墓に入っても良いんじゃないのかい」

紗代には、もう一つ、志麻に内緒にしている事がある。慎吾との切ない想い出だ。紗代は、慎吾から貰った文をいつも懐に入れていた。でも、これだけは、志麻にも言えない。

「じゃー、あの世で教え合おうか」

大川の川面には、涼しげな風が流れていた。

(了)

譚
綴

「紗代と志麻」

二〇〇四年 九月 二十七日
二〇〇六年 三月 二十日 (改)

編集・発行者

エムツー・プラデオ
三谷 弘

M²pladeo
Planning & Design Office

禁無断転載・複写